

二反田遺跡発掘調査報告書

2006年8月

松　江　市　教　育　委　員　会

財団法人松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書 第107集

二反田遺跡発掘調査報告書

2006年8月

松　江　市　教　育　委　員　会

財団法人松江市教育文化振興事業団

例　　言

1. 本書は、(有)不動産ラインズの依頼を受けて、松江市教育委員会と財団法人松江市教育文化振興事業団が平成17年度に実施した民間宅地造成に伴う二反田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に掲載した遺跡の所在地は、鳥根県松江市春日町59、60ほかである。
3. A～E区は平成17年7月1日～8月31日、F区は平成18年1月10日～2月27日の期間に調査を行った。
4. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。また、レベル値は海拔標高を表す。
5. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行1/25,000と、松江圏都市計画図1/2,500をそれぞれ縮小・拡大して使用した。
6. 本書に掲載した図面は、国土地理院発行1/25,000と、松江圏都市計画図1/2,500をそれぞれ縮小・拡大して使用した。
7. 本発掘調査で使用した基準点は、開発業者から提供されたものである。
8. 発掘調査時に作成した図面、写真および出土遺物は松江市教育委員会が保管している。
9. 本書に掲載した写真は、調査員および補助員が撮影した。
10. 本書の執筆は、飯塚、廣瀬、三木、瀬古が行い、文責は目次に記した。
11. 現地調査および報告書の作成にあたっては下記の方々より多大なご指導、ご教示をいただいた。
記して感謝の意を表したい。(敬省略、順不同)

原田 敏照、柳浦 俊一、稻田 陽介（鳥根県埋蔵文化財センター）

凡　　例

1. 本書で使用した遺構番号は以下のとおりである。
P…ピット S I…竪穴住居 S K…土壙 S D…溝
2. 発掘調査時に作成した図面・写真等の記録類、現場で採取した遺物の注記には調査時の地区名・層位名・遺構名を記載している。
3. 本書掲載の遺構図、遺物実測図の縮尺は図中に表示した。
4. 本文、挿図および写真図版の遺物番号は一致する。
5. 遺物番号には次の略号を付し、遺物の種別ごとに番号を通した。なお須恵器は断面を墨塗り、それ以外は白抜きとした。
番号のみ：土器、土製品 S：石器
6. 遺物観察表は、原則として遺物実測図の下に付した。なお、表中法量の（ ）は復元値もしくは残存値を示す。
7. 遺物年代決定に参考にした文献は、本文に記した。

目 次

例言・凡例

目 次

挿 図 目 次

図 版 目 次

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査の経緯.....	(飯塚康行) 1
第2節 調査体制	2

第2章 位置と歴史的環境

(廣濱貴子) 3

第3章 A～E区の調査

第1節 調査の概要.....	(三木雅子) 6
第2節 調査の経過.....	(タ) 10
第3節 検出した遺構と遺物.....	(タ) 10
第4節 包含層の調査と出土遺物.....	(タ) 19
第5節 小 結.....	(タ) 35

第4章 F区の調査

第1節 調査の方法	36
第2節 調査の概要.....	(瀬古諒子) 36
第3節 小 結.....	(タ) 47

第5章 総 括.....

(タ) 48

挿 図 目 次

第1図 調査地X配置図	1	第29図 遺構外出土遺物	34
第2図 松江市位置図	5	第30図 F区地形測量図	36
第3図 周辺の遺跡	5	第31図 F区遺構配図	37
第4図 A～E区地区配置図	6	第32図 F区北壁土層断面図	38
第5図 A～E区遺構配置図	7・8	第33図 F区SI01実測図	39
第6図 C・D区西壁面土層断面図	9	第34図 F区SI01出土遺物実測図(1)	39
第7図 SK01平面図・断面図 および出土遺物	10	第35図 F区SI01出土遺物実測図(2)	39
第8図 SK02平面図・断面図 および出土遺物	11	第36図 F区SI02・03実測図	41
第9図 SD01平面図・断面図 および出土遺物	12	第37図 F区SI02・03遺物出土状況	42
第10図 SD01出土遺物	13	第38図 F区SI02・03出土遺物実測図	43
第11図 SD02～SD04 平面図・断面図	15	第39図 F区SD01・02実測図 出土遺物実測図	44
第12図 SD02・04出土遺物	16	第40図 F区遺構外出土遺物実測図	46
第13図 D区ピット配置図	18		
第14図 ピット平面図・断面図 および出土遺物	19		
第15図 7層出土遺物	20		
第16図 10層出土遺物(1)	21		
第17図 10層出土遺物(2)	22		
第18図 10層出土遺物(3)	23		
第19図 10層出土遺物(4)	24		
第20図 10層出土遺物(5)	25		
第21図 10層出土遺物(6)	26		
第22図 12・13層出土遺物(1)	27		
第23図 12・13層出土遺物(2)	28		
第24図 12・13層出土遺物(3)	29		
第25図 12・13層出土遺物(4)	30		
第26図 12・13層出土遺物(5)	31		
第27図 12・13層出土遺物(6)	32		
第28図 12・13層出土遺物(7)	33		

図版目次

図版 1	1. A～D区調査前全景（南東から） 2. A～D区完掘全景（南東から）	図版 9	1. 12・13層出土遺物(1) 2. 12・13層出土遺物(2)
図版 2	1. A～D区完掘全景（南から） 2. E区完掘全景（南から）	図版10	1. 造構外出土遺物 2. A～E区出土石器
図版 3	1. SK01土層断面（南から） 2. SK01完掘状況（南から） 3. SK01出土遺物 4. SK02土層断面（北から） 5. SK02完掘状況（南東から） 6. SK02出土遺物 7. SD01出土遺物 8. SD02・04出土遺物	図版11	1. F区調査前近景（南西から） 2. F区南西側調査後（南西から）
図版 4	1. SD01～SD08 完掘状況（東から） 2. SD01～SD08 完掘状況（西から） 3. SD01A-A' 土層断面（西から）	図版12	1. F区SI02・03完掘状況 2. F区SI01土層堆積状況 3. F区SI01遺物出土状況
図版 5	1. SD01 D区西壁面土層断面 （北東から） 2. SD02完掘状況（南東から） 3. SD02土層断面（南西から） 4. SD03・04完掘状況（西から）	図版13	1. F区SI02完掘状況（南から） 2. F区SI02造構・遺物検出状況 3. F区SI02中央ピット土層断面
図版 6	1. D区ピット完掘状況（北西から） 2. P10土層断面（南から） 3. P13土層断面（南から） 4. ピット出土遺物 5. 7層出土遺物	図版14	2. F区SI02壺・高杯出土状況 3. F区SI02鼓形器台出土状況
図版 7	1. 10層出土遺物(1) 2. 10層出土遺物(2)	図版15	1. F区SI03完掘状況（西から） 2. F区SI03造構・遺物出土状況 3. F区SI03鼓形器台出土状況
図版 8	1. 10層出土遺物(3) 2. 10層出土遺物(4)	図版16	1. F区SI03完掘状況（西から） 2. F区SI03造構・遺物出土状況 3. F区SI03鼓形器台出土状況
		図版17	1. F区SI03高杯（脚部）出土状況 2. F区SI03・02完掘状況（南から） 3. F区発掘作業風景
		図版18	F区SI01・02出土遺物
		図版19	F区SI03出土遺物
		図版20	F区造構外出土遺物

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査の経緯

二反田遺跡は、松江市の市街地から北方へ約2kmの春日町59番地ほかに位置する。現況は水田である。

有限会社不動産ラインズでは、春日町地内の水田約2,500m²を対象として宅地開発を計画し、平成17年4月28日付けで松江市教育委員会あてに埋蔵文化財分布調査依頼書が提出された。

これを受け同月6日にトレンチ5箇所による試掘調査を実施した結果、古墳時代の須恵器や土師器のほか、旧河道が発見されたことから、遺跡の存在が確認され、字名より「二反田遺跡」と命名された。

この遺跡の取り扱いについては、工事計画の変更が困難であることから、事業区域内の本発掘調査を実施することとなり、平成17年7月1日から平成17年8月31日の合計30日をかけてこれを実施した。調査面積は884m²である。(A~E区)

その後、二反田遺跡の北側に隣接する南向きの斜面部約1,150m²を対象として2期工事が計画され、遺跡の存在する可能性が考えられた事から、同年9月20日にトレンチ3箇所による試掘調査を実施したところ、古墳時代初頭の竪穴住居跡の存在が確認され、二反田遺跡の広がりとして把握された。2期工事にかかる遺跡の取り扱いについては、市道が設置される部分だけを本調査の対象とし、宅地部分は盛土施工により遺跡の地下保存を図ることとなった。本調査の期間は平成18年1月10日から平成18年2月27日の合計24日である。調査面積は180m²である。(F区) (飯塚康行)



第1図 調査地区配置図

第2節 調査体制

依頼者 (株)不動産ラインズ

主体者 松江市教育委員会

事務局 松江市教育委員会 教育長 福島 律子

参考(兼文化財課長) 岡崎雄二郎

文化財課調査係長 飯塚 康行

実施者 財団法人松江市教育文化振興事業団

理事長 松浦 正敬

専務理事 長野 正夫

事務局長 松浦 克司

調査係長 濑古 碩子

(A~E区) 調査員 落合 昭久

補助員 廣瀬 貴子、金坂 有史、三木 雅子

(F区) 調査員 江川 幸子

補助員 野津 哲志

本書に掲載した遺物の実測およびトレース、遺構のトレースは主として下記の者が行った。

遺物(実測)：北島和子、善家幸子、高尾万里子、時安順子、野津哲志、野津里佳

秦愛子、廣瀬貴子、三木雅子

(トレース)：北島和子、野津哲志、秦愛子、三木雅子

遺構(トレース)：飯野正子、野津哲志、三木雅子

発掘調査時には下記の方々に作業員として従事してもらった。(50音順)

今岡靖夫、岩成博美、角田ミヤ子、景山紀和、加藤恵治、木村俊弘、小松原茂、瀬利貞、

高橋 積、田中和美、土江直紀、時安順子、秦岡富士子、細田信子、細田勇治、三島昌美、

吉岡永子、吉川 穀、渡部孝次

第2章 位置と歴史的環境

二反田遺跡(1)は松江市街地の北側、春日町二反田に位置する。島根半島の北山山系からつらなる比津丘陵、現在の淞北台団地から東奥谷町一帯にかけて丘陵が形成され、丘陵の南側には市街地を形成する平野部が広がっている。現在、調査区の北側には城北通りが通っているが、以前は小高い丘陵と丘陵間の谷底平野のようなところであったと考えられる。東側には農業用のため池(山原谷池)があり、調査前は水田と果樹園であった。

本遺跡周辺から旧石器時代の遺跡はまだ発見されていない。後期旧石器時代の安山岩製の尖頭器が大門遺跡(30)から、玉髓製の振器が白鹿谷遺跡(12)から発見されている。

縄文時代の遺跡としては法古遺跡があり、縄文土器やドングリの集積跡が検出された。

弥生中期の遺跡としては石田遺跡(48)があり、中期後葉の竪穴住居跡や加工段が検出され、弥生土器や石器、板状鉄斧が出土している。弥生後期の遺跡としては田中谷遺跡(28)や下がり松遺跡(26)が調査されている。竪穴住居跡や掘立柱建物跡、旧河遺跡などの遺構が検出され、多数の弥生土器や石製品、木製品などが出土している。

古墳時代の遺跡は本遺跡周辺に多く存在している。古墳は北山山系から派生する丘陵尾根上や端部に多い。前期末の築造になると考えられている石田遺跡の石田古墳からは内行花文鏡やヒスイ製の勾玉が出土している。月廻占墳群(31)や折廻占墳群(17)は前期から中期の占墳群である。月廻占墳群は箱式石棺や砾床を伴う木棺が検出され、出土遺物から5世紀中葉を中心に比較的短期間に形成された古墳群である。塙山古墳(27)は1辺33mの造り出し付き方墳で、主体部には砾床の上に舟形と思われる削り抜きの木棺を置く構造である。古墳時代中期のものとしては大きい方で、法古周辺を拠点とした首長墓と考えられている。後期古墳としては伝宇牟加比売命御陵古墳(23)、岡山薬師古墳(10)が調査されている。伝宇牟加比売命御陵古墳は1辺16mの造り出し付き方墳で、主体部は石匁を伴う木棺であったと考えられる。岡山薬師古墳は横穴式石室をもつ方墳で、墳丘の盛土途上において何らかの祭祀がおこなわれていた。他にも松ヶ崎古墳(9)や新宮古墳(24)、久米古墳群(32)、唐梅古墳群(34)などが存在する。6世紀後半以降になると多くの横穴墓が造られている。20基の横穴薄が確認され、人骨、須恵器、大刀などが出土した、ひのさん山横穴墓群(4)、後背墳丘をもつ横穴墓が確認された菅出横穴墓群(7)、比津ヶ崎横穴墓群(39)、ひゃくだ横穴墓(40)などである。古墳時代の集落跡の様相は余りよくわかっていないかったが、田中谷遺跡から掘立柱建物跡や加工段が検出され、少しづつ明らかにされてきた。また、長谷窓跡推定地(14)では6世紀後半の燎着した須恵器片が多く採集されており、須恵器窓があったと考えられている。

奈良、平安時代の遺跡としては集落遺跡の調査例が多い。田中谷遺跡のV-W区から出土した遺物の中には石器や墨書き土器などもみられ、この地に官人が存在したことを窺わせる。白鹿谷遺跡からも石器が出土した他、8~9世紀代の須恵器が出土している。須恵器の中には灰かぶりや熔着したものが多く、須恵器窓が當っていたと考えられる。下がり松遺跡や久米遺跡からは掘立柱建物跡が検出されている。

中世以降の遺構では、二反田古墓(11)や下がり松遺跡の古墓、コゴメダカ山遺跡(15)などが確認されている。二反田古墓は室町時代から安土・桃山時代の古墓で、石敷基壇や宝鏡印塔、火葬壙が

検出された。下がり松遺跡から出土した古墓は長方形の石積基壇で、基壇上面の搅乱層から火葬骨、五輪塔、瓦が出土し、五輪塔から室町時代後半と考えられている。コゴメダカ遺跡では宋銭・明錢と脇差1が出土し古事と思われる。

戦国時代には白鹿山を中心に白鹿山城砦跡群(13)が築かれた。白鹿山城砦群は宍道湖、大橋川、島根半島の水運を把握する拠点として尼子氏に重視された所で、急峻な地形を利用して防御施設が造られている。尼子氏に属した松田氏の居城である。

近世には松江城(50)が築かれた。堀尾吉晴が出雲・隱岐二十四万石の太守に封じられて、広瀬町の宮田城に入ったのち、この地に移り築いた城である。
(廣済)

<参考文献>

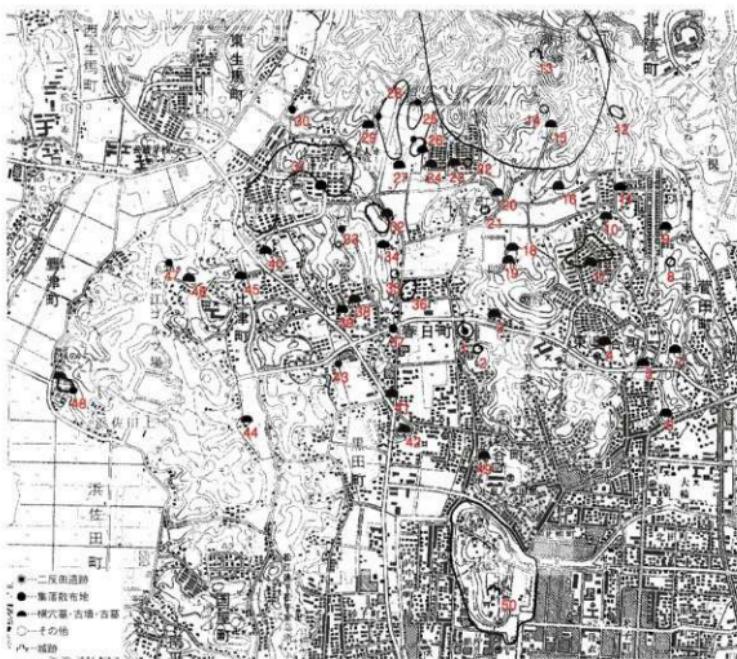
- 前鳥 己基 「月曜古墳群」『日本考古学年報』25 1972年版
島根県教育委員会1986 「岡山薬師古墳」
島根県教育委員会2002 「山中谷遺跡 塚山古墳 下がり松遺跡 角谷遺跡」
島根県教育委員会1998 「出雲・隱岐の城館跡」
松江市教育委員会1987 「二反田古墓」
松江市教育委員会2000 「久米遺跡群発掘調査報告書」松江市文化財調査報告書第82集
岡崎雄二郎1989 「松江市法吉・長谷廻跡推定地について」『松江考古』第7号
岡崎雄二郎・坪倉武久2001「松江市・白鹿遺跡について(2)」『松江考古』第9号

周辺遺跡一覧表

1 二反田遺跡	13 白鹿山城砦跡群	25 角谷遺跡	38 久米横穴墓群
2 田原社跡推定地	14 長谷廻跡推定地	26 下がり松遺跡	39 比叡が崎横穴墓群
3 煙浦倉古墳	15 コゴメダカ山遺跡	27 塚山古墳	40 ひやくだ横穴墓
4 ひのさん山横穴墓群	16 豊谷荒神古墳	28 田中谷遺跡	41 法吉小学校裏山横穴墓群
5 桜崎横穴墓	17 斎庭古墳群	29 田中谷古墳	42 摩利支天山横穴墓群
6 萩崎・切通横穴墓群	18 栗元古墳	30 大門遺跡	43 春日遺跡
7 菅田横穴墓群	19 栗元横穴墓	31 月曜古墳群	44 小丸山古墳
8 萬沢砲跡	20 山横古墳群	32 久米古墳群	45 水ぬき崎横穴墓群
9 松ヶ峰古墳	21 山状丘陵群	33 久米遺跡	46 ゴルフ場内横穴墓群
10 岡田薬師古墳	22 篠谷遺跡	34 唐梅古墳群	47 ゴルフ場内古墳群
11 二反田古墓	23 伝宇牟加比売命御陵古墳	35 石在経塚	48 石田遺跡
12 白鹿谷遺跡	24 新宮古墳	36 法吉遺跡	49 赤山横穴墓群
		37 中代遺跡	50 松江城



第2図 松江市位置図



第3図 周辺の遺跡

第3章 A～E区の調査

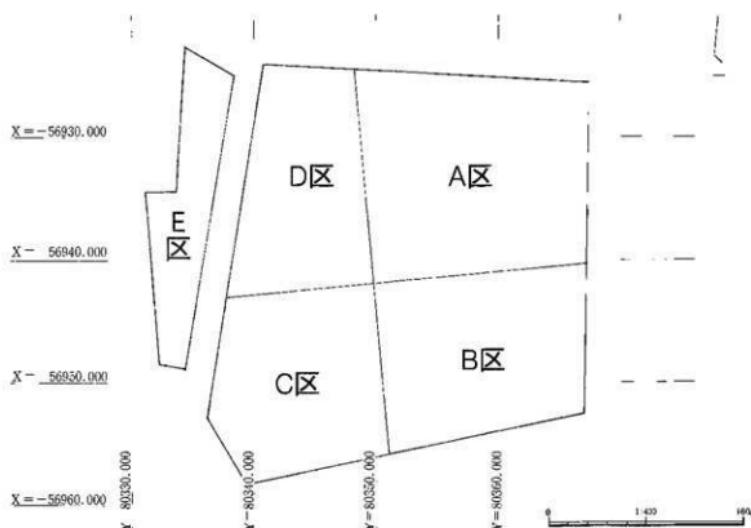
第1節 調査の概要

本調査地は、春日町地内の通称「城北通り」と呼ばれる道路の南側、標高4m前後に位置する低地である。東側には農業用水として長年使われてきた山原谷池が隣接し、発掘調査実施以前は水田として使用されていた。北側には緩やかな丘陵が広がり、調査地はその裾部の平坦地にあたる。

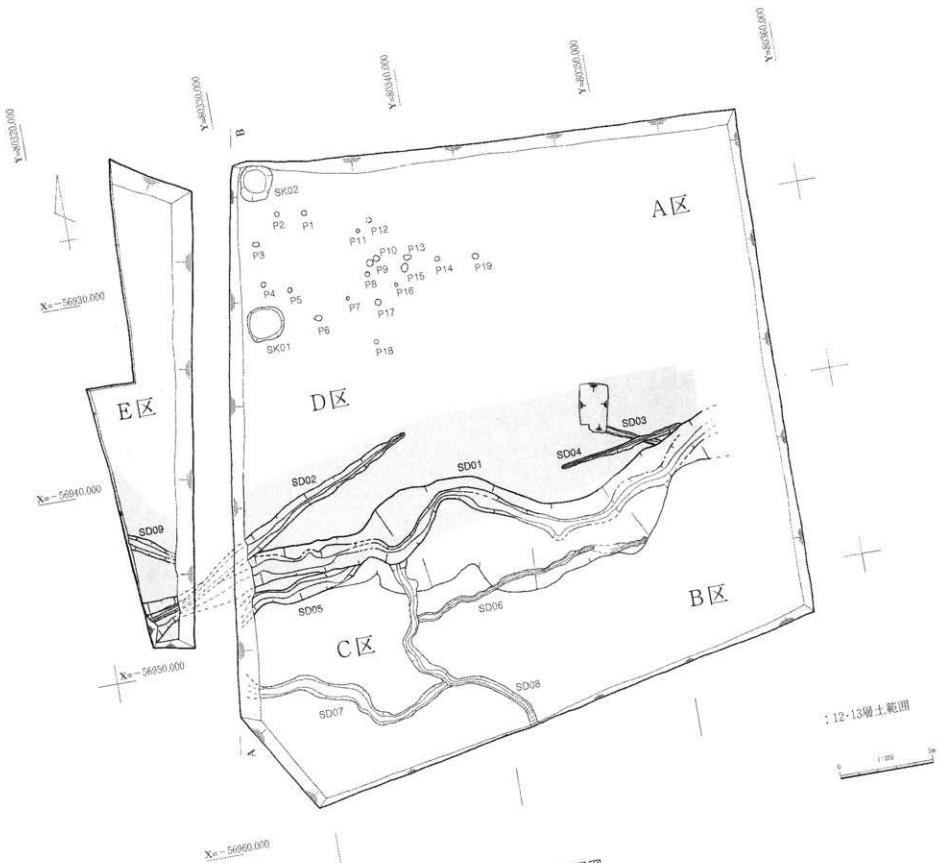
調査の便宜上、調査地内を南北に走る農業用水路をはさみ東側をA～D区、西側をE区とした。A～D区は、調査地を東西に走るSD01の北端と東西のほぼ中央を軸に、北東のブロックから時計回りにA～D区の呼称をつけた。

なお遺構名は、調査時と本書では呼称変更しているので、新旧遺構対照表を下記に記す。

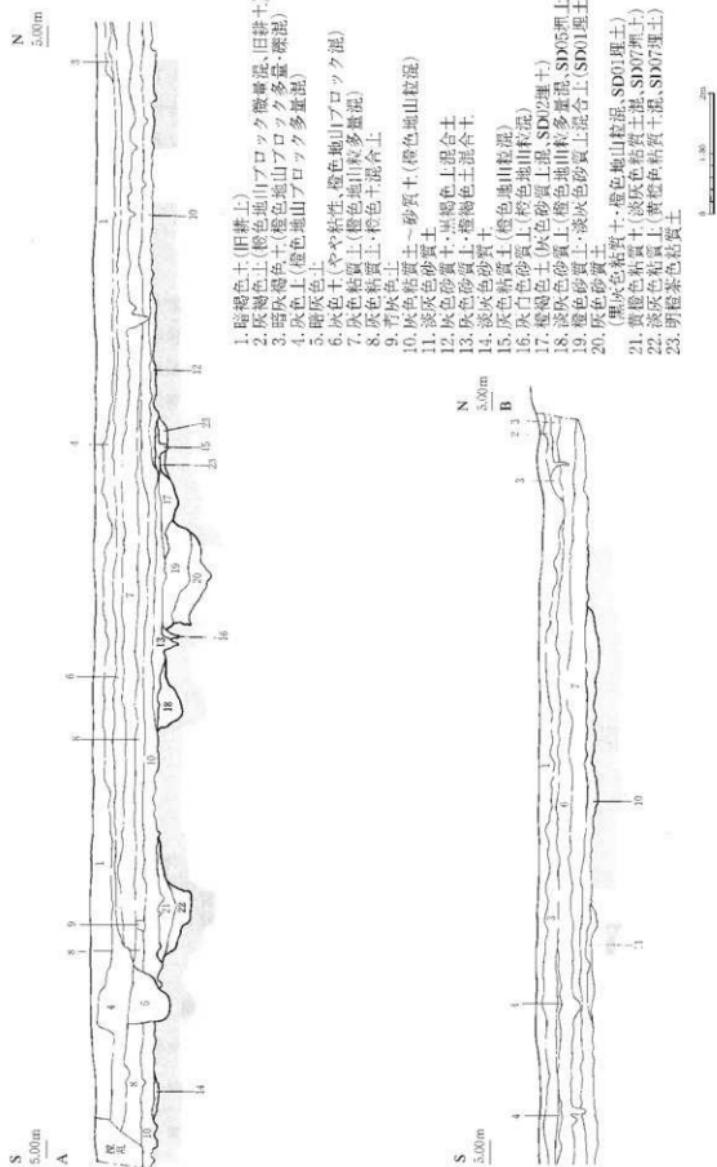
報告書掲載遺構名	調査時遺構名	報告書掲載遺構名	調査時遺構名	報告書掲載遺構名	調査時遺構名
SK01	円形土壙2	SD09	SD09	P10	P6
SK02	円形土壙1	P1	P12	P11	P19
SD01	SD04	P2	P13	P12	P17
SD02	SD01	P3	P16	P13	P20
SD03	SD06	P4	P1	P14	P24
SD04	SD05	P5	P2	P15	P21
SD05	SD02	P6	P18	P16	P22
SD06	SD03	P7	P4	P17	P15
SD07	SD07	P8	P8	P18	P10
SD08	SD07	P9	P7	P19	P23



第4図 A～E区地区配置図



第5図 A~E区遺構配置図



第6図 C・D区西壁面土層断面図

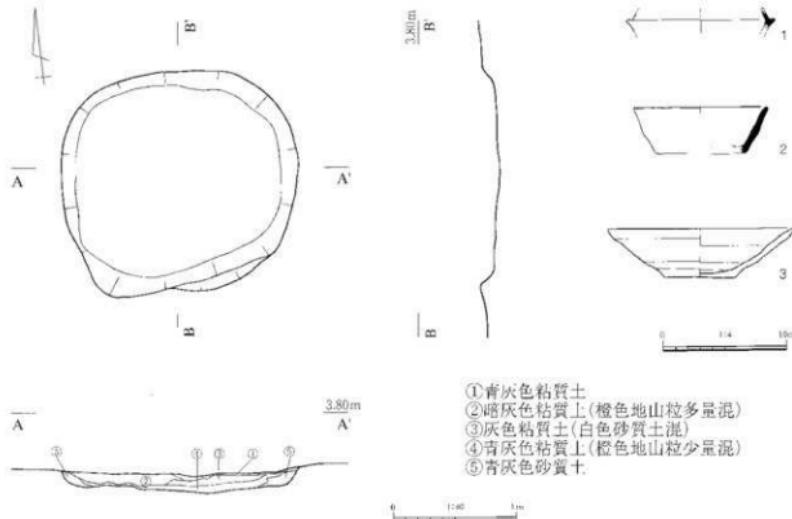
第2節 調査の経過

調査はまず、重機を使用し、旧耕土を掘削した。表十下約50cmで遺物が多く含まれる灰色粘質土(7層)を検出したので、以下は人力での掘削を行った。遺物包含層である7層を除去した後、8層直上で造構検出を行ったが、造構が検出できなかったため、さらに掘削を行った。下層の遺物包含層である10層を除去した後、再度、造構検出を行った。その結果、土壙2基、溝9条、ピット19基を検出した。

第3節 検出した造構と遺物

SK01 (第7図、図版3)

D区西端において検出した、長径1.94m、短径1.8mの平面不整円形を呈する土壙である。検出面からの深さは22cmを測る。上部は削平を受けていると考えられ、本来は検出レベルよりも高いところから掘り込まれていたと想定される。遺物は埋土下層の④・⑤層から須恵器片が2点、土師器片が1点出土している。2・3は平安時代の遺物であることから、7層以上から掘り込まれた可能性が高い。出土遺物から、平安時代の造構と考えられる。



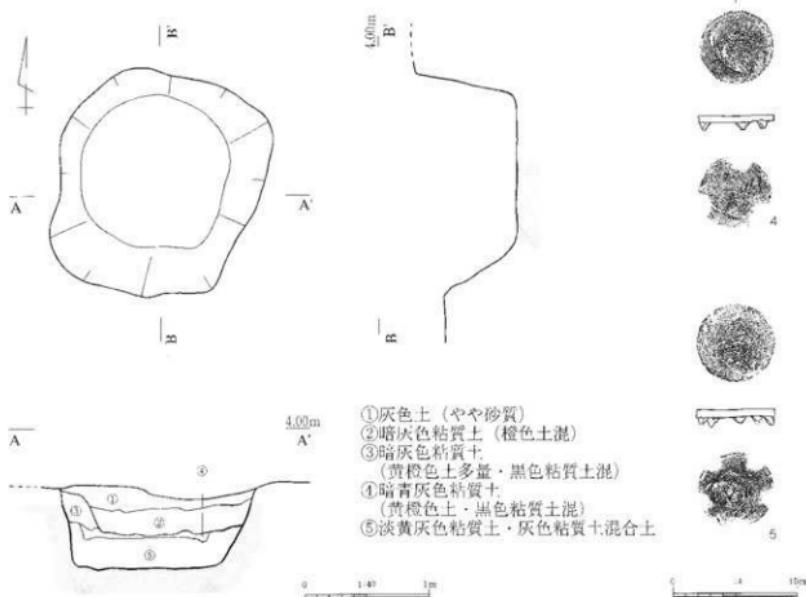
第7図 SK01平面図・断面図および出土遺物

No	図版 位置・地区	器種	法 量(cm) 口径 底径 器高	色 調	調 整	残存部位	残存率	備 考
			(cm)		内 面 西 外 面			
1	3 D区 SK01 ④層	須恵器 片	(10.0) — (2.0)	灰色	ナデ ナデ	口縁～受部	1/10	
2	3 D区 SK01 ⑤層	須恵器 片	(10.6) — (7.0)	3.8 外：淡灰色 内：灰色	ナデ ナデ	口縁～底部	1/8	
3	3 D区 SK01 ④層	土師器 片	15.0 —	5.8 4.0 にふい黄橙色	不明 不明	口縁～底部	1/2	

SK02 (第8図、図版3)

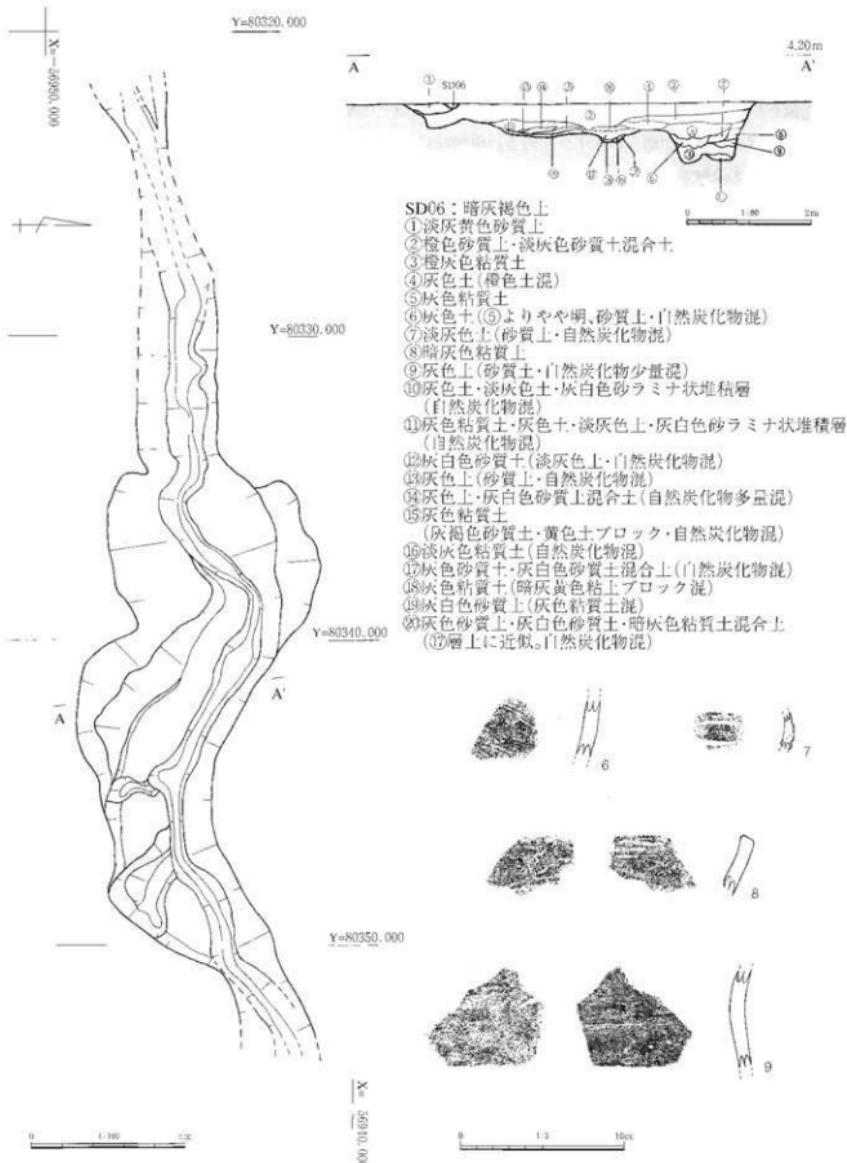
D区北西隅において検出した、長径1.8m、短径1.62mの平面不整円形を呈する土壙である。検出面からの深さは68cmを測る。断面の観察から、少なくとも3度は掘り返されていると考えられる。最初に⑤層埋土部(A)が掘られ、これが埋まつた後③・④層埋土部(B)が再度掘られ、最終的に①・②層埋土部(C)が掘られたようである。遺物はCの埋土である②層からのみ出土している。下層からの出土遺物は小片のみで固形化できず、時期も不明である。よって、A・Bが掘削された時期は不明である。

4・5は陶器製の窯道具で、足付ハマと呼ばれるものである。上面下面糸切りで切り離した褐色の円盤状の台に、3つもしくは5つの橙色の円錐状の足を付けたものである。陶器の碗や皿を重ね焼きする際に使用されるもので、一般的に使用されるようになるのは、19世紀に入ってからである。このことから最終的に掘られたCの部分は、19世紀末以降の、近世の遺構と考えられる。

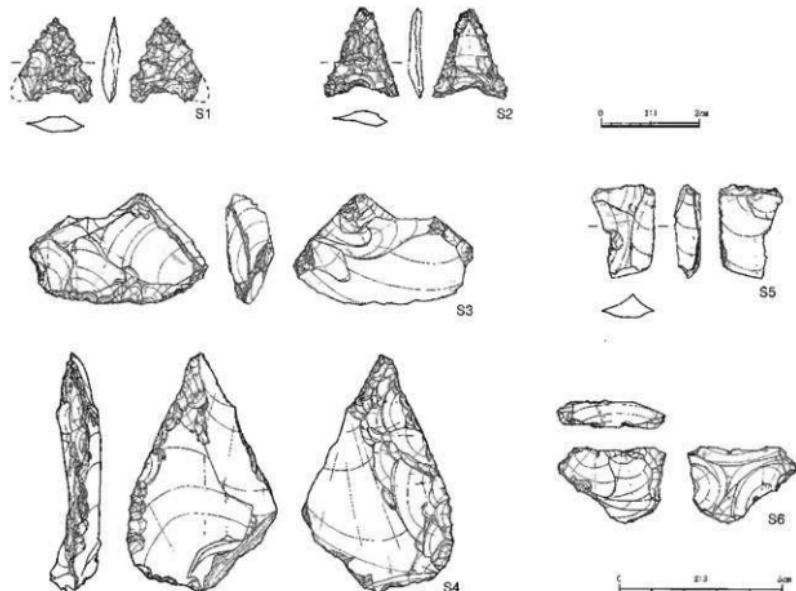


第8図 SK02平面図・断面図および出土遺物

No.	図版	層位・地区	器種	法		色調	内面	外面	残存部位	残存率	備考
				口径	底径						
4	3	D区 SK02 ②層	陶器 窯道具	-	6.5	1.4	台:に赤い・橙色 脚:浅黄色	上面糸切	下面糸切 盤状三足貼付	完存	三足ハマ
5	3	D区 SK02 ②層	陶器 窯道具	-	6.5	1.6	台:褐色 脚:浅黄色	上面糸切	下面糸切 盤状五足貼付	完存	五足ハマ



第9図 SD01平面図・断面図および出土遺物



第10図 SD01出土遺物

No	図版	層位・地区	種別	法 長(cm)	幅 口径 底径 高さ	色 調	内 面	外 面	残存部位	残存率	備考
6	3	B-C区 SD01 ⑩-⑪層	縄文土器 型?	-	-	外:灰褐色 内:褐色	一枚貝条痕	ナデ?	2mm以下の 砂粒多量含む	小片	前期前半?
7	3	B-C区 SD01 ⑩-⑪層	縄文土器 深鉢?	-	(2.3)	にぼい黄褐色	擬似縄文? 平行する非常 に深い沈線	不明	2mm以下の 砂粒(白灰)含む	小片	元住吉I(堆 現山)後期中 葉木~後葉
8	3	B-C区 SD01 ⑩-⑪層	縄文土器 無文深鉢?	-	-	外:暗褐色 内:褐色	一枚貝条痕	ナデ 不明	2mm以下の 砂粒・黒墨母 少量含む	小片	晩期前半?
9	3	B-C区 SD01 ⑩-⑪層	縄文土器 無文深鉢?	-	-	外:暗褐色 内:暗褐~黑色	一枚貝条痕	ケズリ様の調 整	1mm以下の 砂粒多く含む 黒墨母含む	小片	深鉢頭部か 7と同一個?

No	図版	層位・地区	種別	法 長(cm)	幅 最大幅 最大厚	重さ(g)	材質	備考
S1	10	B-C区 SD01⑩層	石核	1.7	1.4	0.3	0.55	黒曜石 基部欠損
S2	10	B-C区 SD01⑪層	石核	1.8	1.5	0.3	0.46	黒曜石
S3	10	B-C区 SD01⑩-⑪層	スクレイバー	3.4	5.4	1.3	19.92	黒曜石
S4	10	B-C区 SD01⑩-⑪層	スクレイバ-	7.0	4.3	1.1	28.64	黒曜石
S5	10	B-C区 SD01⑩-⑪層	使用痕のある 剥片	2.9	1.9	0.7	3.27	黒曜石
S6	10	B-C区 SD01⑩-⑪層	石核	2.3	3.3	0.8	5.17	黒曜石

S D01 (第9・10図、図版3~5)

A~D区のほぼ中央とE区の南端に検出した。幅1.6~5.5m、検出面からの深さ0.8m前後を測る、南北に小さく蛇行しながら東西に流れる自然流路である。底面レベルは西端と東端の差が約30cmあり、緩やかに東から西に下がっている。このことから、東から西への水の動きがあったであろうことが推測できる。また、流水によって大きく抉られている箇所もあることから、一時的な大きな流れもあったことが考えられる。上層からは弥生土器片、下層の⑩・⑪層からは縄文土器が数点出土しており、少なくとも縄文時代から弥生時代にかけて、溝として機能していたことが推測できる。また、⑩層はラミナ状堆積を呈しており、出土した遺物が埋没していることからも、北側の最深部分はある程度の速さをもった流れがあり、調査区の東側から流されてきたと考えられる。また調査区内からは、同時期に位置づけられ遺構が他には検出されていないことからも、調査区の東側に縄文時代の遺跡の存在が考えられるであろう。

出土遺物は圓化したものの他に、土器小片が少量、多量の黒曜石剥片等が出上している。石器類で非掲載のものの総点数は、黒曜石のものは、加工痕のある剥片1点、使用痕のある剥片4点、剥片115点、石核4点。安山岩のものは剥片1点である。ほとんどは下層部分からの出土である。

6~9は縄文土器である。6は全体的に磨滅が激しいものの、外面に二枚貝条痕がみられる。7は深鉢の口縁部と思われる破片で、外面には平行する深い沈線が施され、上方の沈線の上に擬似縄文と思われる痕跡がかすかにみられる。縄文時代後期中葉末~後葉のものと考えられる。8は口縁部で、内面口唇部付近に二枚貝条痕がみられる。9は外面に上方に二枚貝条痕、内面上方にケズリ様の調整がされている。8・9は胎土・色調が同様な事から同一個体のものと思われ、縄文時代晚期前半の無文深鉢の破片と考えられる。

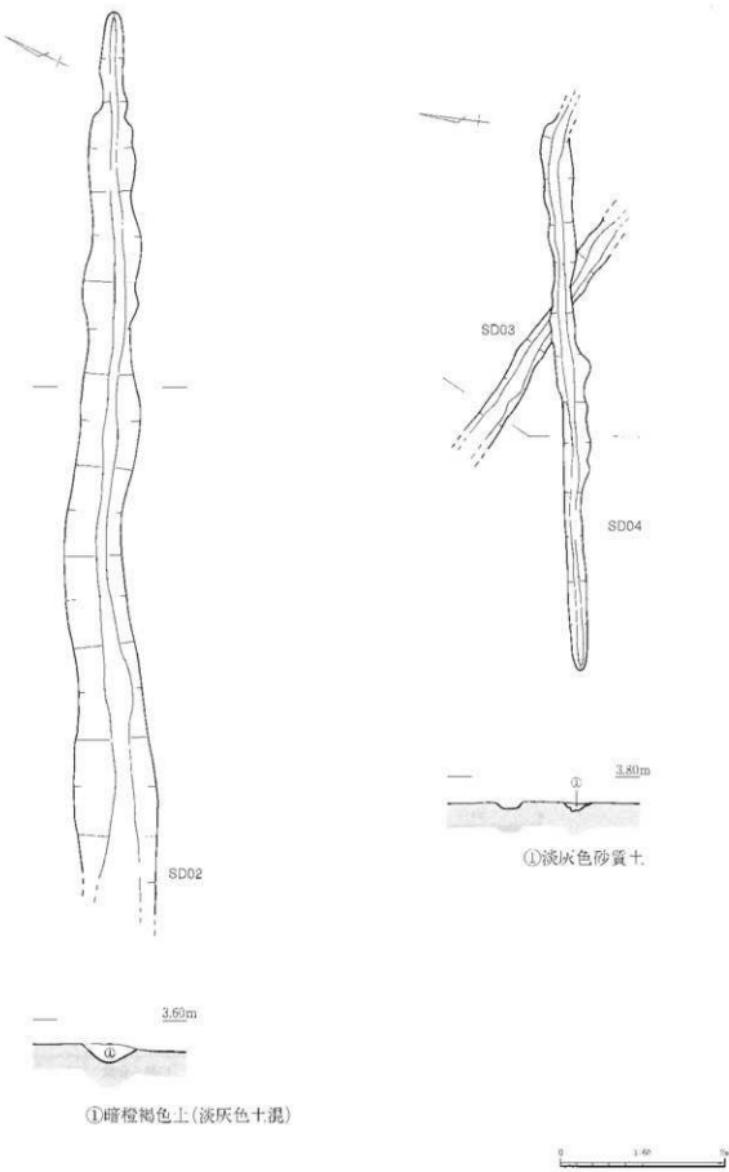
S 1・S 2は石礫であるが、共に上層からの出土である。S 1は抉りの浅い凹基式のもので、基端は丸みを帯びている。S 2はやや鍛身が長く、浅い抉りの入る凹基式のものである。片面には大きな主要剥離面を残す。S 3・S 4はスクレイパーで、共に側面に原縁面を残す。S 5は側面に使用痕が認められる剥片である。S 6は石核で、数方向からの打痕がみられる。

S D02 (第11・12図、図版3~5)

D区南西からE区南端にかけて検出した、幅120~60cm、検出面からの深さ約20cmを測る、北東から南西に伸びる自然流路と考えられる溝である。S D 0 1を切って交差して検出しており、北東部は終息している。底面レベルは南西部にむかって下がっていることから、北東から南西に向かっての水の動きがあったと考えられる。

出土遺物は圓化したものの他に土器小片、黒曜石剥片3点、瑪瑙石核1点、剥片1点、が出土している。

10は弥生土器で、松本編年V-1様式に相当するものである。口縁端部は上に引き出され、2条の凹縁が施されている。S 7は鍛身の長い、抉りの浅い凹基式の石礫であるが、欠損した基部をさらに加工した痕跡が見られる。S 8は安山岩製の打製石斧である。表面は風化が激しく、片面は剥離している。検出状況と調査区壁面の断面と出土遺物から、S D 0 1埋没後~弥生時代後期前葉の遺構と考えられる。



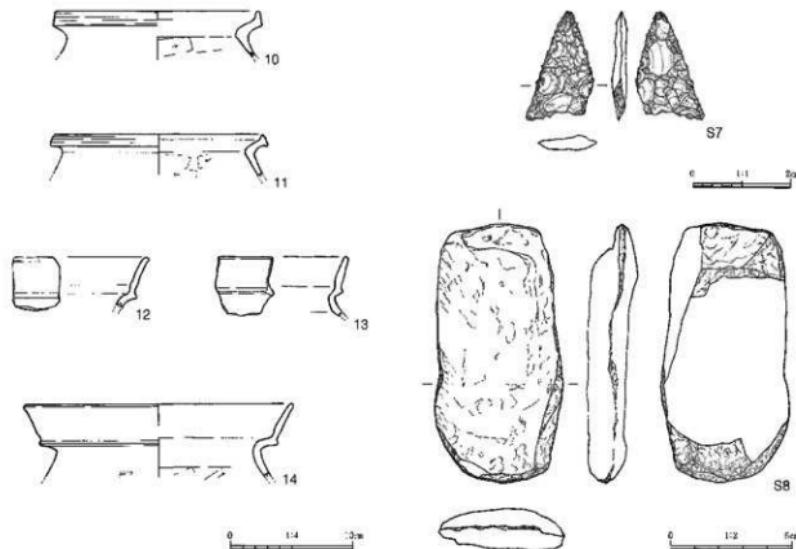
第11図 SD02～SD04平面図・断面図

S D 03・S D 04 (第11・12図、図版3~5)

A区南端に検出した、幅40~24cm、検出面からの深さ15cm前後を測る、ほぼ東西に伸びる自然流路と考えられる浅い溝である。12・13層上面で検出しており、本来はさらに東に伸びていたと考えられる。S D 04がS D 03を切っているが、埋土がほぼ同様な色の砂質土を呈していることから、大きな時期差はないと考えられる。

図化した遺物はS D 04のものだけである。図化していないものには、S D 03から出土している黒曜石剝片2点が、S D 04のものにはが黒曜石剝片3点、安山岩剝片1点がある。

11は弥生土器で、口縁端部は上下に拡張され、凹線文が施されている。松本編年V-1様式に相



第12図 SD02・04出土遺物

No	図版	層位・地区	器種	汎量(cm)			色調	調整		残存部位	残存率	備考
				口径	底径	高さ		内面	外面			
10	3	C区 SD02①層	弥生土器	(16.3)	-	(4.0)	外:褐~暗褐色 内:褐色	□:ナデ 体:ケズリ	□:2条凹線 体:ナデ	口縁~体部	1/8	
11	3	B区 SD04①層	弥生土器	(16.9)	-	(3.6)	外:灰褐色 内:黄褐色	□:ナデ 体:ケズリ	□:2条凹線 体:ナデ	口縁~体部	1/8	
12	3	B区 SD04①層	土師器	-	(4.0)	灰黄色	ナデ	ナデ	ナデ	口縁	小片	
13	3	B区 SD04①層	土師器	-	(4.7)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	□:ナデ 体:ケズリ	ナデ	ナデ	口縁~体部	小片	外向撥付着
14	3	B区 SD04①層	土師器	(22.0)	-	(6.0)	にぶい黄褐色	□:ナデ 体:ケズリ	□:2条凹線 体:ハケ	口縁~体部	1/8	

No	図版	層位・地区	種別	汎量(cm)				材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)		
S7	10	C区 SD02 ①層	石鏃	2.2	1.4	0.3	0.70	黒曜石	基部再加工
S8	10	C区 SD02 ①層	打製石斧	10.6	5.1	1.8	139.32	安山岩	

当するものであろう。12~14は複合口縁の甕である。12は口縁端部に平坦面が見られ、外側の稜はやや下垂している。13も口縁端部に平坦面がみられるものである。14は口縁端部が丸くおさめられている。それぞれ草田編年6~7期に相当するものであろう。

検出状況と出土した遺物から、SD04は古墳時代前期の遺構だと考えられ、SD03もそれに近い時期の遺構だと考えられる。

SD05（第5図、図版4）

C区北西、SD01の上面で検出した。幅68~100cm、検出面からの深さ11~30cmを測る、東西に伸びる自然流路と考えられる浅い溝である。本来はSD01の上面を、さらに東に伸びていたと考えられ、西は調査区外へと伸びている。

遺物は黒曜石剥片が1点出土しているのみで、遺物からは明確な時期は判断できないが、C・D区西壁面の断面から、12・13層以下の遺構であると判断できるため、SD01埋没後~弥生時代末期・古墳時代初頭の範疇におさまる遺構だと考えられる。

SD06~SD08（第5図、図版4）

C区で検出された、幅38~78cm、検出面からの深さは18~52cmを測る、自然流路と考えられる溝である。SD07・08はさらに調査区外へと伸びている。方向には統一性が見られないが、平面形は蛇行し、壁面は大きく抉られている箇所が多く見られる。埋土の色調はほぼ同じで、灰色系の砂質土の単層である。これらの形態が類似していることから、大きな時期差はない、一遇性のものであると考えている。

出土遺物は、SD08から黒曜石剥片が1点出土しているのみで、遺物からは明確な時期は判断できないが、C・D区西壁面の断面で、SD07が10層以下の遺構であると判断でき、SD06はSD01のA-A'セクションでSD01を切っていることから、SD01埋没後~弥生時代末期・古墳時代初頭の遺構だと考えられる

SD09（第5図）

E区南で検出された、幅70~75cm、検出面からの深さは8~14cmを測る、ほぼ東西の方向に伸びる自然流路と考えられる浅い溝であるが、C区ではその続きを検出することができなかった。

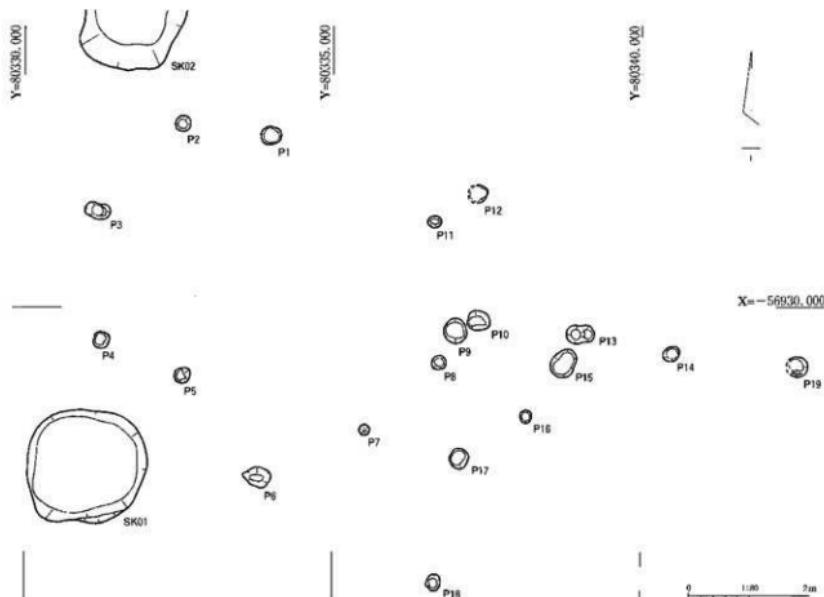
遺物は出土していないが、埋土が灰色砂質土を呈することから、SD02~SD08と同様な性格、時期の遺構だと考えられる。

ピット（第13・14図、図版6）

調査区北西部のD区のみで、ピットを19基検出した。ピットの深さは、10~20cm程度の浅いものがほとんどで、本来は検出面よりも上層から掘り込まれていた可能性が高い。ほとんどのピットは単層であったが、いくつかのピットでは、柱痕もしくは抜取痕が見られた。しかし、これらのピットからは、建物跡を想定できるような配列や規則性がみられないことから、これらのもつ性格は明確にできなかった。

また、ピットの埋土は、大きく褐色系と灰色系の2種類に分けることができるため、これらのピットは少なくとも2時期に分けて構成されていたと考えられる。褐色系のものは7層以上からの掘り込み、灰色系のものは、前述のいくつかの自然流路と埋土が類似していることから、SD01埋没後～7層土堆積までの2時期に、大きく分けることができるのではないかと考えられる。

ピット内からは土器小片や黒曜石剥片が出土しているものがあるが、図化できたものは、2点のみである。黒曜石の剥片はP2とP7から1点ずつ出土しているが、遺構に伴うものではないと考えられる。



第13図 D区ピット配置図

D区ピット計測表

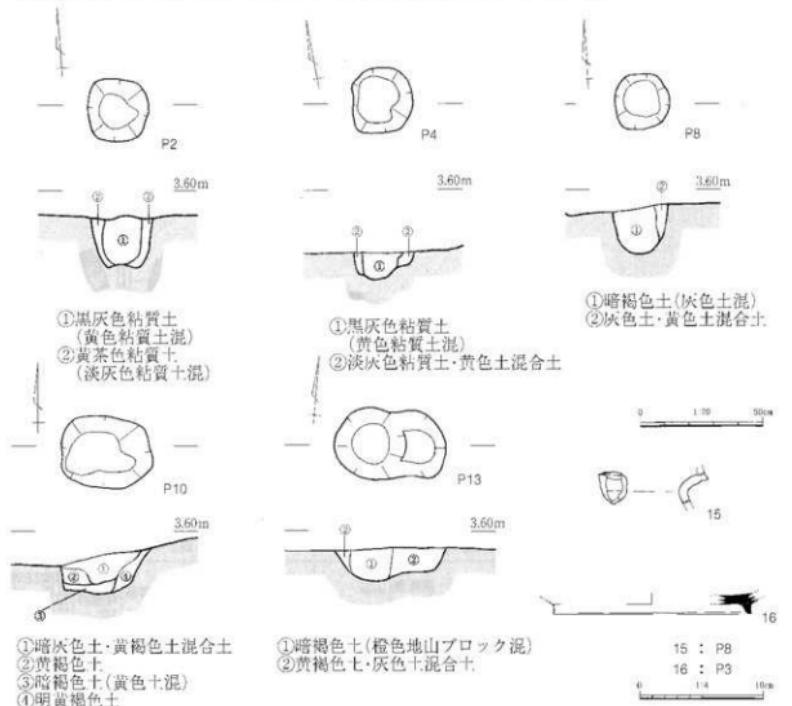
P番	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面レベル(m)	主 要 土 色
P1	31	30	10.6	-3.442	暗褐色粘質土・黃褐色土混合土
P2	26	25	19.2	-3.304	黃褐色粘質土(淡灰色粘質土含む)
P3	42	23	19.9	-3.146	灰色粘質土
P4	26	24	15.5	-3.191	淡灰粘質土・黃褐色土混合土
P5	27	25	10.7	-3.297	暗灰色土・黃褐色土混合土
P6	46	31	11.6	-3.340	暗褐色土(黃褐色土、灰色土含む)
P7	18	18	9.6	-3.428	灰色土・黃褐色土混合土
P8	22	22	19.6	-3.340	灰色土・黃褐色土混合土
P9	39	37	12.1	-3.394	暗灰色土・黃褐色土混合土
P10	36	29	33.8	-3.200	暗灰色土・黃褐色土混合土
P11	23	20	21.9	-3.195	灰色粘質土・黃褐色土混合土
P12	30	(20)	17.3	-3.487	黃褐色土(灰色土含む)
P13	46	30	14.3	-3.387	灰色土・黃褐色土混合土
P14	27	23	6.5	-3.449	灰色土・黃褐色土混合土
P15	48	39	14.7	-3.384	暗褐色土(棕色地山ブロック泥)
P16	20	18	13.2	-3.389	暗褐色土(棕色地山ブロック泥)
P17	33	31	20.5	-3.332	灰色粘質土・暗褐色土混合土
P18	27	24	22.0	-3.215	赤褐色土(灰色土含む)
P19	36	34	17.0	-3.394	暗褐色土

えられる。

15はP 8から出土している、弥生土器の壺の口縁である。口縁端部の上半は欠損しているが、下半は下に拡張され、凹線の痕跡がみられる。松本編年V-1様式に相当するものであろう。16はP 3から出土している須恵器の高台付壺の底部である。8世紀頃のものと考えられるので、P 3は少なくとも、包含層である7層もしくはそれ以上からの掘り込みである事が考えられる。

第4節 包含層の調査と出土遺物

調査区内において、7層、10層、12・13層の包含層を確認した。12・13層は土質にほとんど違いが見られなく、SD 01がほぼ埋没した後の浅いくぼみに一括で流入した土と考えられるので、同層として捉えている。以下に各層についての概要と出土遺物について述べる。



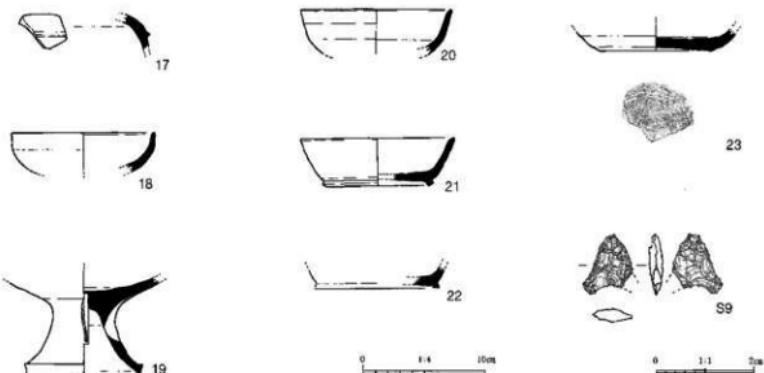
第14図 ピット平面図・断面図および出土遺物

No.	図版	層位・地区	器種	法量(cm)			色調		整面	残存部位	残存率	備考
				口径	底径	器高	内面	外面				
15	6	D区 P8	弥生土器 壺?	-	-	(2.6)	外: 明黄白色 内: 明黄色	ナデ	口: 凹線 体: ナデ	口縁	小片	
16	6	D区 P3	須恵器 壺?	-	(16.0)	(1.8)	灰色	ナデ	ナデ 底: 細切	底部	1/8	貼付高台

7層出土遺物（第15図、図版6）

7層は、表土下約50cm、標高3.7～3.8mのレベルで上面を検出した。灰色粘質土を呈し、調査区全体に20cm程度の厚さで堆積している。遺物は須恵器・土師器・黒曜石の石器や剥片などが出土しているが、図化できたものは少ない。

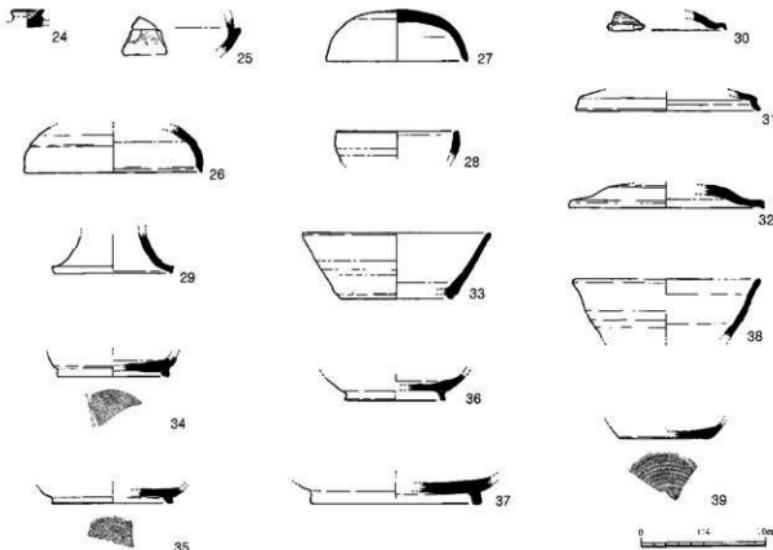
17は壊蓋である。小片ではあるが、外面肩部には小さく引き出された鋭い稜をもつ。18は下部の破面がやや肥厚気味な事から、無蓋高杯の壊部と考えられる。口縁部はやや内傾している。19は低脚の高壊脚部で、脚柱部の透かしは2方向の切れ目で、1方向は未貫通である。脚端部はほぼ直立するしっかりとした面をもつ。18・19は古墳時代終末～奈良時代のものと考えられる。20は壊の口縁部で、口縁端部はやや外反気味である。21・22は壊で、共に底面回転系切り後、高台が貼り付け



第15図 7層出土遺物

No.	図版	層位・地区	器種	法量(cm)		色調	内面		外面		残存部位	残存率	備考
				口径	底径		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ			
17	6	D区 7層	須恵器 壊蓋	—	—	(3.0)	灰白色	ナデ	ナデ	体部	—	小片	—
18	6	D区 7層	須恵器 壊	(11.7)	—	(3.2)	灰色	ナデ	ナデ	壊部上半	—	1/8	高壊か？
19	6	B区 7層	須恵器 高壊	—	(9.3)	(7.9)	外:灰～淡灰色 内:淡灰色	ナデ	ナデ	壊下部～脚部	—	4/5	脚部2方向切 れ口、1方向は未貫通 1/2
20	6	B区 7層	須恵器 壊	(12.2)	—	(3.6)	外:暗灰色 内:灰色	ナデ	ナデ	壊部上半	—	1/8	—
21	6	C区 7層	須恵器 壊	(12.6)	(9.0)	(3.8)	外:暗灰～灰色 内:灰色	ナデ	ナデ	口縁 底:糸切	—	1/4	貼付高台
22	6	D区 7層	須恵器 壊	—	(10.2)	(1.8)	灰色	ナデ	ナデ	底:糸切→ナデ	—	1/12	貼付高台
23	6	D区 7層	須恵器 底部	—	(9.4)	(2.9)	灰色	ナデ	ナデ	底:糸切	—	1/4	—

No.	図版	層位・地区	種別	法量(cm)				材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)		
S9	10	D区 7層	石器	1.2	1.0	0.3	0.23	黒曜石	蓋部欠損



第16図 10層出土遺物 (1)

No.	版	層位・地区	器種	法量 (cm)			色調	両面		残存部位	残存率	備考
				口径	底径	器高		内面	外面			
24	7	D区 10層	須恵器 环	2.7	-	-	灰色	ナデ	ナデ	つまみ部	開示の 1/1	
25	7	D区 10層	須恵器 环或盞	-	-	(3.0)	灰色	ナデ	ナデ	受部直下に 波状	小片	
26	7	B区 10層	須恵器 环	(14.3)	-	(3.7)	灰白色	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	口縁～体部	1/10
27	7	E区 10層	須恵器 环	11.2	-	4.1	灰白色	ナデ	ナデ	ヘラ切→ナデ	口縁～体部	1/2
28	7	D区 10層	須恵器 环	(9.9)	-	(2.4)	暗灰色	ナデ	ナデ	口縁	1/6	
29	7	D区 10層	須恵器 环	-	(9.4)	(3.5)	暗灰色	ナデ	ナデ	脚部	1/4	
30	7	D区 10層	須恵器 环	-	-	(1.5)	淡灰色	ナデ	ナデ	口縁	小片	重焼痕
31	7	D区 10層	須恵器 环	(15.0)	-	(1.6)	外:暗灰色 内:灰色	ナデ	ナデ	口縁	1/8	
32	7	D区 10層	須恵器 环	(15.7)	-	(1.9)	灰色	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	口縁～体部	1/8
33	7	D区 10層	須恵器 环	(15.2)	(9.0)	(5.3)	淡灰色	ナデ	ナデ	口縁～底部	1/10	貼付高台
34	7	D区 10層	須恵器 环	-	(8.9)	(1.6)	暗灰色	ナデ	ナデ	底部	1/4	貼付高台
35	7	D区 10層	須恵器 环	-	(9.8)	(1.2)	外:灰色 内:淡灰色	ナデ	ナデ	底部	1/6	貼付高台
36	7	D区 10層	須恵器 环	-	(8.0)	(2.2)	外:灰～暗灰色 内:灰色	ナデ	ナデ	底部	1/5	貼付高台
37	7	D区 10層	須恵器 皿		(13.6)	(2.1)	暗灰～褐色	ナデ	ナデ	底部	1/4	貼付高台 环部焼成不良
38	7	D区 10層	須恵器 环	(15.0)	-	(4.8)	灰白色	ナデ	ナデ	口縁	1/10	
39	7	D区 10層	須恵器 环	-	(6.8)	(1.4)	灰色	ナデ	ナデ	底部	1/3	

られている。奈良～平安時代のものであろう。23は、回転糸切り痕の残る底部であるが、器種は不明である。

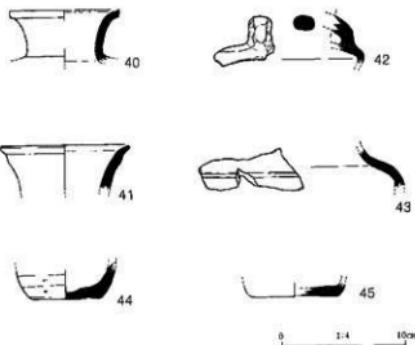
S 9は凹基式の石縁である。基部の抉りこみは浅く、小型品である。7層出土石器で圓化していないものの総数は、黒曜石の使用痕のある剥片3点、剥片7点である。

10層出土遺物（第16～21図、図版7・8・10）

10層は、表土下約80cm、標高3.4～3.5mのレベルで上面を検出した。灰色粘質土～砂質土を呈し、調査区全体に10～20cm程度の厚さで堆積している。遺物は弥生土器・須恵器・土師器・土製品・黒曜石の石器などが多く出土しており、摩滅しているものが多く見られる。

24は坏蓋のつまみ部で、中央は大きくくぼんでいる。25は有蓋高杯もしくは壺の受部と思われる。受部直下にかすかに波状文が残る。26は口徑が大きな坏蓋で、27は口徑の縮小が進んだもので、極小型する直前のものである。26は古墳時代後期後葉のもの、27は古墳時代終末のものである。28は坏の口縁部で、奈良時代のものと思われる。29は高杯の脚部で、端部は外傾する形をもち、上下にかすかにひき出される。古墳時代後期後葉のものであろう。30～32は坏蓋で、30は口縁に平坦面をもち、端部は下にひき出されている。31は、輪状のつまみが付くタイプと考えられる。32は直立して立ち上がり、端部は外反している。32も坏蓋で、器高が低く宝珠状のつまみが付くタイプである。口縁端部は半円面を作り出しているが、立ち上がりは短い。31は奈良時代のもの、30・32は平安時代のものであろう。33～35は高台付坏で、33は高台部から直線的に聞くもので、34・35は底面に回転糸切り痕が残るものである。奈良～平安時代のものと考えられる。36も高台付坏であるが、前者よりはやや古く、奈良時代のものであろう。37は高台付の皿と思われるもので、底面には静止糸切り痕がみられる。奈良時代前半のものであろう。38・39は坏で、39の底部には回転糸切り痕が残る。

奈良時代後葉～平安時代初頭のものと考えられる。

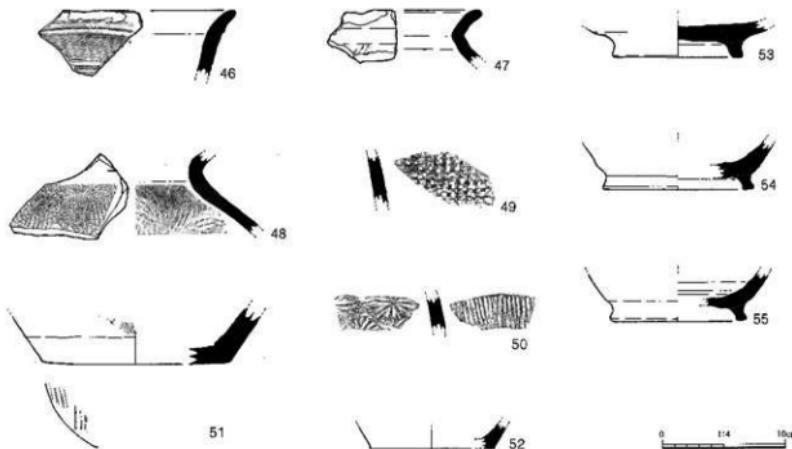


第17図 10層出土遺物(2)

No	図版	層位・地区	器種	法量(cm)			内面	背面	残存部位	残存率	備考
				内径	底径	器高					
40	7	D IX 10層	須恵器 壺or瓶	(8.8)	-	(4.3)	暗灰色	ナデ	ナデ	口縁部	1/2
41	7	D IX 10層	須恵器 壺or瓶	(10.2)	-	(3.6)	暗灰色	ナデ	ナデ	口縁部	小片
42	7	D IX 10層	須恵器 把手	-	--	(4.1)	外:灰白～灰色 内:灰白色	ナデ	ナデ	把手部	図示の 1/1 平底か
43	7	D IX 10層	須恵器 壺	-	-	(3.3)	外:暗灰色 内:灰色	ナデ	ナデ	頭部 ～体部	小片
44	7	D IX 10層	須恵器 足	-	(5.4)	(2.8)	灰色	ナデ	ヘラケズリ 底:糸切	底部	1/4
45	7	D IX 10層	須恵器 壺?	-	(7.0)	(1.1)	淡灰～灰色	ナデ	ナデ 底:糸切→ナデ	底部	1/4 瓶or罐か

40・41は壺か瓶の口縁と考えられる。40は口縁端部に平坦面をもつもので、41は口縁が短く外反している。42は平底の把手部だと考えられるもので、把手と体部はしっかりと接合されている。43は壺であろうか、肩部直下に2条の沈線が回っている。44は壺の底部かと思われる。底面には静止糸切り痕が残る。45は器種不明の底部であるが、底面には回転糸切り痕が残る。

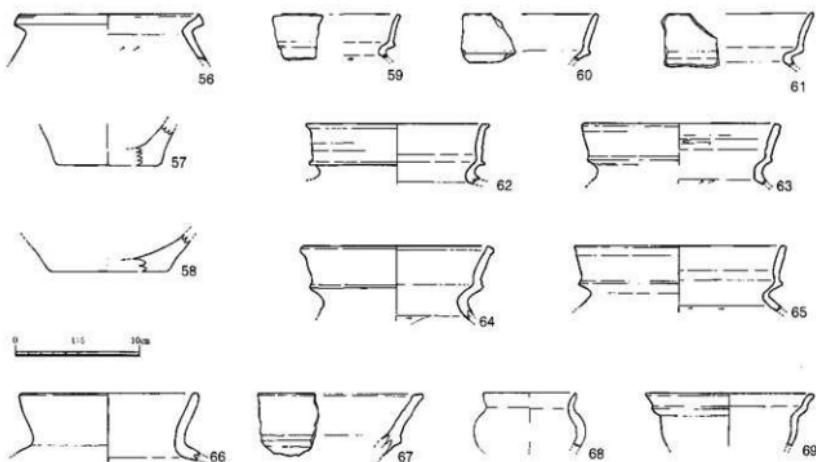
46は壺の口縁部で端部は短く外反している。端部下にはゆるい突帯をめぐらし、櫛描き波状文が施されている。47は短頸の壺である。48～50は壺の体部で、内外面に当て具痕が残る。51・52は半底の底部である。49～51は平安時代のものであろう。53～55は貼付高台をもつ底部であるが、53は壺のもの、54・55は長頸壺のものと考えられる。古墳時代終末～奈良時代のものであろう。



第18図 10層出土遺物 (3)

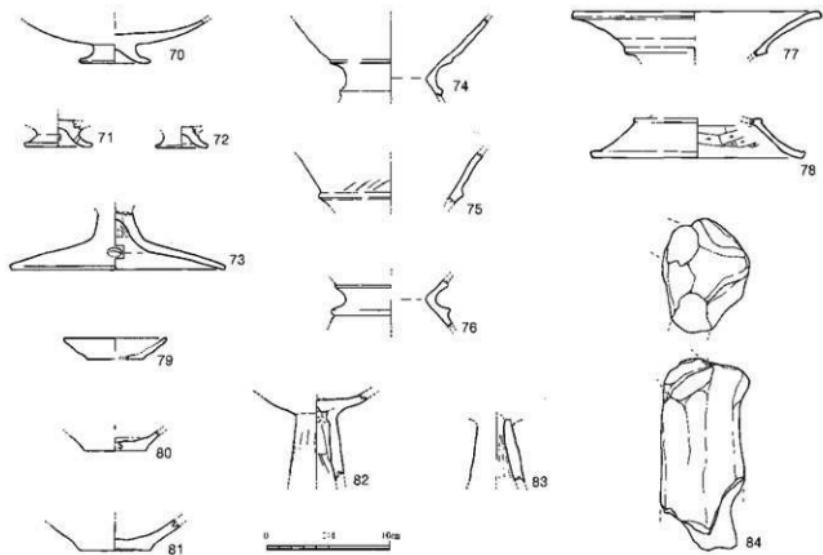
No.	図版	層位・地区	器種	法量(cm)		色調	内面	調査		残存部位	残存率	備考
				口径	底径			底	壁			
46	7	D区 10号	須恵器 壺	-	-	(5.3) 灰色	ナデ	ナデ	口縁:波状文	口縁	小片	
47	7	D区 10号	須恵器 壺	-	-	(4.3) 外:灰 内:灰～暗灰色	ナデ	ナデ	山:ナデ 体:平行タタキ	口縁～頸部	1/8	
48	7	D区 10号	須恵器 壺	-	-	(6.4) 淡灰色	ナデ	ナデ	口:ナデ 体:同、小円 タタキ	頸部～体部	小片	外面自然釉 付着
49	7	D区 10号	須恵器	-	-	(3.8) 外:淡黃褐色 内:灰白色	ナデ	ナデ	格子目タタキ	体部	小片	
50	7	D区 10号	須恵器	-	-	(2.7) 灰色	ナデ	ナデ	放射状タタキ	体部	小片	
51	7	D区 10号	須恵器 底部	-	(15.2)	灰～淡灰色	ナデ	タタキ、ナデ	底:ヘラ切後 部タタキ	底部	1/8	
52	7	D区 10号	須恵器 底部	-	(10.1)	(2.1) 灰色	ナデ	ナデ	底:ヘラ切?	底部	1/7	
53	7	D区 10号	須恵器 底部	-	(10.6)	(2.9) 外:灰～暗灰色 内:灰色	ナデ	ナデ	底:ヘラ切→ナデ	底部	3/4	貼付高台
54	7	E区 10号	須恵器 壺	-	(12.4)	(4.0) 灰色	ナデ	ナデ	底:未調整 底:ヘラ切→ナデ	底部	1/8	貼付高台
55	7	E区 10号	須恵器 壺?	-	(11.2)	(3.9) 外:灰～暗灰色 内:暗灰色	ナデ	ナデ	底:ヘラ切?→ナデ	底部	1/2	貼付高台

56~58は弥生土器で、56は壺の口縁で、端部の平坦面は内傾し、上方にわずかにつまみ出されている。松本編年V-1様式のものであろう。59~65は複合口縁の壺である。59・63は口縁縫部に狹



第19図 10層出土遺物 (4)

No	図版	層位・地区	器種	法 量(cm) 口径・底径・器高	色 調	調 整	残存部位	残存率	備考
						内面 外面			
56	8	B区 10層	弥生土器 壺	(14.4) — (3.8)	外:にぶい赤褐色 内:黄褐色 灰黃棕色	口:ナデ 体:ヘラケズリ	口:1条以上凹 窪・不明 体:不明	口縁～全体	1/8
57	8	B区 10層	弥生土器 壺	— (8.0) (3.4)	淡黃褐色	不明	不明	底部	1/6
58	—	B区 10層	弥生土器 底部	— (9.2) (3.1)	外:にぶい黄褐色 内:褐灰色	不明	不明	底部	1/4
59	8	B区 10層	土器器 壺	— (3.7)	にぶい黄褐色	口:ナデ 体:ヘラケズリ	ナデ	口縁～頭部 小片	外面煤付着
60	—	D区 10層	土器器 壺	— (3.8)	外:灰褐色 内:にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	口縁	小片
61	8	B区 10層	土器器 壺	— (4.5)	外:にぶい黄褐色 内:浅黄褐色	口:ナデ 体:ヘラケズリ	不明	口縁～頭部 小片	
62	8	B区 10層	土器器 壺	— (4.9)	淡黄色	口:ナデ 体:ヘラケズリ	ナデ	口縁～頭部	1/8 外面煤付着
63	8	B区 10層	土器器 壺	— (16.1)	外:灰白色 内:淡灰褐色	口:ナゲ→ナデ 体:ヘラケズリ	ナデ	口縁～頭部	1/8 外面煤付着
64	8	B区 10層	土器器 壺	— (14.6)	浅黄色	口:ナデ 体:ヘラケズリ	ナデ	口縁～頭部	1/12
65	8	B区 10層	土器器 壺	— (17.2)	外:淡黄褐色 内:浅黄褐色	口:ナデ 体:ヘラケズリ	ナデ	口縁～頭部	1/8 外面煤付着
66	8	C区 10層	土器器 壺	— (14.4)	外:浅灰褐色 内:浅灰褐色	不明	不明	口縁	1/1
67	8	B区 10層	土器器 壺?	— (5.1)	外:にぶい黄褐色 内:暗褐色	ナデ	ナデ	口縁	小片
68	8	C区 10層	土器器 壺	— (7.4)	外:暗灰褐色 内:暗褐色	不明	不明	口縁～体部	1/8



第20図 10層出土遺物 (5)

No	図版	地区・層位	器種	法量(cm)		色調	調整		残存部位	残存率	備考	
				口径	底径		内面	外面				
70	8	B区 10番	土師器 低脚環	-	(5.8)	淡黃色	ナデ	ナデ	坏部 ~脚部	1/3		
71	8	C区 10番	土師器 低脚環	-	(5.5)	淡黃褐色	ナデ	不明	脚部	1/4	脚部に円孔	
72	8	D区 10番	土師器 低脚環	-	4.2	外:橙~にぶい褐色 内:にぶい褐色	不明	不明	脚部	1/1	区小の	
73	8	B区 10番	土師器 低脚環	-	(17.0)	淡黃褐色~褐色	不明	不明	脚部	1/3		
74	8	D区 10番	土師器 鼓形器台	-	(6.4)	外:明褐~淡褐色 内:灰褐色~淡褐色	不明	ナデ	受下 ~脚上	1/8		
75	8	B区 10番	土師器 鼓形器台	-	(4.4)	にぶい黄褐色	不明	ナデ ヘラ状工具による斜行文	受部下	1/6		
76	8	C区 10番	土師器 鼓形器台	-	(4.0)	淡黃褐色	不明	不明	受下 ~脚上	1/4		
77	8	B区 10番	土師器 鼓形器台	(20.0)	-	淡黃褐色	不明	不明	受部	1/8		
78	8	B区 10番	土師器 鼓形器台	-	(17.0)	外:淡黃褐色 内:淡褐色	ケズリ~ナデ	ナデ	脚部	1/5		
79	8	D区 10番	土師器 皿	(8.4)	(4.5)	外:橙色 内:にぶい褐色	不明	不明	口縁 ~底部	2/3		
80	8	D区 10番	土師器 环	-	(5.0)	外:淡褐色 内:淡黄色	ナデ	ナデ 底:糸切	底部	1/2		
81	8	D区 10番	土師器 环	-	3.7	(2.4)	外:淡褐色 内:浅黃褐色~褐色	ナデ	底:糸切	底部	1/1	区小の
82	8	A区 10番	土師器 高环	-	(7.1)	褐色	シボリ	不明	坏部 脚部	1/1	坏部に脚接合 時の剥離あり	
83	8	B区 10番	土師器 环	-	(5.0)	褐色	シボリ	不明	脚筒部	1/1	脚部を环に差し込むタイプ	

No	図版	地区・層位	種類	法量(cm)		調整	胎七	色調	備考
				最大長	最大幅				
84	8	D区 10番	支脚	(15.7)	9.0	7.2	840.0	ナデ 1mm以下の砂 粒多く含	緑色

No	版 面 版 10	層位・地区	種別	法量(cm)				材質	備考
				最大長	成人幅	最大厚	重さ(g)		
S10	D区 10層	砾石		11.5	2.9	2.2	178.56	頁岩	

い平坦面をつくっており、60・61は薄く引き出して丸くおさめている。62・64・65は口縁端部が外方へ折り曲げられており、62は口縁下端部の稜が鋭い。これらは弥生時代終末～古墳時代初頭のものである。66は単純口縁の甕で、器壁はやや厚みがあり、比較的高い口縁部で、口縁端部は丸くおさめられている。古墳時代中期の所産であろう。67は複合口縁の甕で、口縁端部は平坦面がつくられ、外方へ折り曲げられている。68は小型丸底甕で、丸い体部に短い口縁をもつ。69は鉢で、口縁は屈曲して外方へ開いている。67・69は古墳時代前期、68は古墳時代中期のものと思われる。

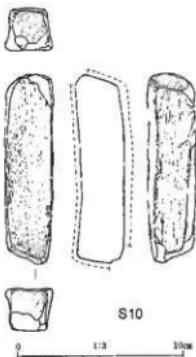
70～72は低脚杯である。70は平らな杯底部からゆるやかなカーブで立ち上がる杯部をもつもので、脚端部はハの字状に開く。71・72も脚端部はハの字状に開いており、72は比較的小ぶりなものである。71の脚には少なくとも1円孔が穿孔されている。73は大きく聞く低い高杯の脚部で、少なくとも1方向の凸形の透かし穴がある。74～78は鼓形器台で、いずれも筒部が縮約したものである。74は筒部内面が稜線となっている。75は受部下半外面にヘラ状の工具でつけたと思われる斜行文が施されている。77・78は端部が外に大きく広がり、筒部の縮約がより進んだものである。70～78は弥生時代終末～古墳時代前半のものである。79は皿、80・81は杯の底部である。摩滅が激しいものの、80・81の底面には不明瞭だが、回転糸切り痕がみられる。これらは中世のものであろう。82・83は高杯で、82は円盤充填するもので、接合時の刺突痕が、杯底面に残っている。83は底のある杯部と脚部を別々につくるタイプのものである。82は古墳時代前期、83は古墳時代中期のものである。84は三叉突起タイプの土製支脚である。突起部と脚端部は欠損している。背面の突起部は前面のものよりも小さい。

S10は砾石で、各面ともよく磨られ使い込まれている。10層出土石器で図化していないものの総数は、黒曜石のものが、石器未製品1点、楔形石器1点、使用痕の剥片4点、石核3点、剥片44点である。その他の石材は、安山岩剥片3点、瑪瑙剥片2点である。

12・13層出土遺物（第22～28図、図版9・10）

12・13層は、表上下約90cm、標高3.1～3.3mのレベルで上面を検出した。灰色砂質土をベースとした上が、SD01の上面を覆うように5～10cm程度の厚さで堆積している。遺物は弥生土器・土師器・土製品・黒曜石の石器や剥片などが多量に出土おり、そのほとんどは摩滅が激しい。

85～87は弥生土器の甕口縁である。口縁端部は上下に拡張され、平坦面は内傾し、凹線が施されている。松木編年V-1様式のものである。88～90は底部で、弥生土器のものであろう。91は動物の頭の部分と思われる土製品である。上馬かとも思われるが、耳の辺りがさらに延びそうな様相を呈しているので、鹿などのほかの動物を模ったものとも考えられる。92・93は土玉で、93は3分の

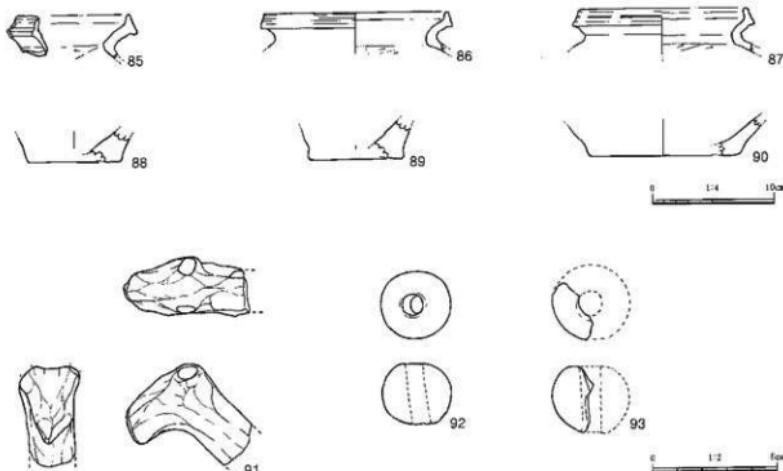


第21図 10層出土遺物 (6)

1が残るのみである。

94~107は複合口縁の壺である。口縁端部は94・101・107のように薄く引き出されたもの、95~97・103のように丸くおさめられているもの、98・104~106のように狭い平坦面をつくるもの、99・100・102のように外方へ折り曲げられているものがある。口縁下端部の後は水平に突出し、鈍いものが多い。弥生時代終末~古墳時代前期におさまるものである。

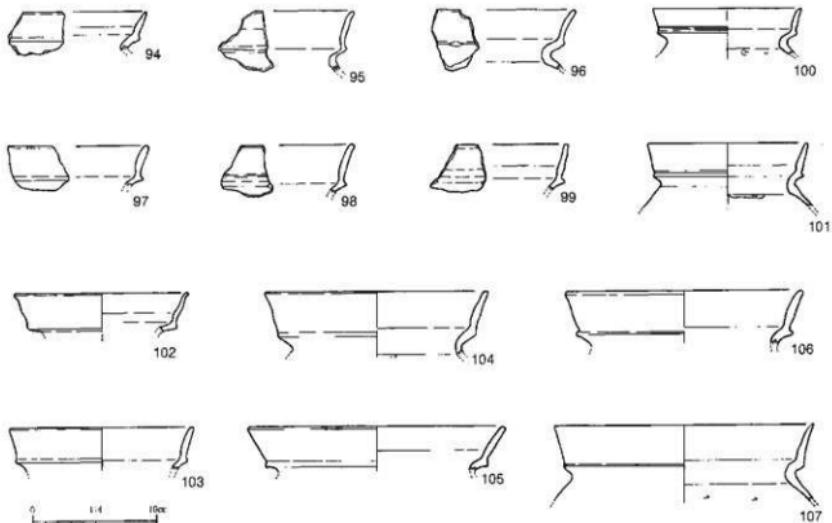
108~112は単純口縁の壺である。108は口縁の中央あたりがやや肥厚し、端部には平坦面がつくられている。109~112は口縁端部が丸くおさめられており、110は厚手である。これらは古墳時代



第22図 12・13層出土遺物 (1)

No	図版	地区・層位	種別	法量(cm)				調整	胎上	色調	備考
				最大幅	最大厚	重さ(g)					
91	9	A区 12・13層	獸頭?	4.1	5.1	2.4	28.64	不明	1mm以下の砂 粒多く含	褐色~ 淡褐色	十馬か?
92	9	B区 12・13層	土瓦	2.5	2.8	3.7	17.44	ナデ	1mm以下の砂 粒少含	灰黄色	1/3残
93	9	B区 12・13層	土瓦	2.7	(3.2)	—	6.32	ナデ	1mm以下の砂 粒少含	灰黄色	ほほ穴存

No	図版	層位・地区	器種	法量(cm)		色調	調整		内面	外面	残存部位	残存率	備考
				口径	底径		口:ナデ	口:2条凹線					
85	—	B区 12・13層	弥生土器 甕	—	—	(3.6)	外:にい黄褐色 内:にい黄褐色	口:ナデ 体:ケズリ	口:2条凹線 体:ナデ	口缘~体部	小片	—	—
86	9	B区 12・13層	弥生土器 甕	(14.8)	—	(3.4)	外:浅黃褐色~ 内:にい黄褐色	口:ナデ 体:ケズリ	口:2条凹線 体:ナデ	口缘~体部	1/8	外面媒付着	—
87	9	B区 12・13層	弥生土器 甕	(13.4)	—	(3.7)	外:褐灰色 内:淡白色	口:ナデ 体:ケズリ	口:2条凹線 体:ナデ	口缘~体部	1/8	—	—
88	9	B区 12・13層	弥生土器 底盤	—	(7.6)	(2.5)	外:淡黃褐色~ 内:淡黃褐色	不明	不明	底部	1/4	—	—
89	9	B区 12・13層	弥生土器 底盤	—	(7.4)	(3.0)	外:褐灰色 内:淡黃褐色	不明	不明	底部	1/4	—	—
90	9	C区 12・13層	弥生土器 底盤	—	(12.6)	(3.0)	外:明黄褐色~ 内:淡黄色	不明	不明	底部	1/6	—	—

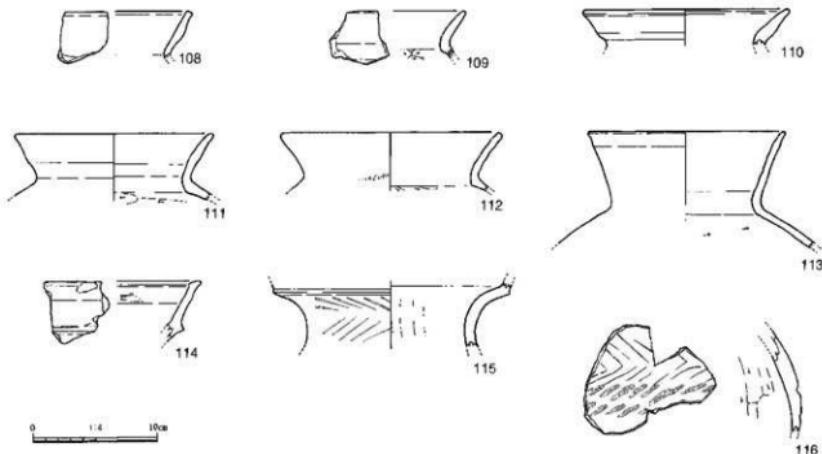


第23図 12・13層出土遺物 (2)

No.	図版	層位・地区	器種	法面 (cm)		色調	調査		残存部位	残存率	備考
				口径	底径		内面	外面			
94	-	B区 12・13層	土師器 甕	-	-	(3.2) にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	口縁	小片	
95	-	B区 12・13層	土師器 甕	-	-	(5.0) にぶい黄橙色	口:ナデ 体:ケズリ?	ナデ	口縁～体部	小片	
96	9	B区 12・13層	土師器 甕	-	-	(5.0) 外:灰黄色 内:浅黄色	口:ナデ 体:ケズリ	ナデ	口縁～体部	小片	
97	9	B区 12・13層	土師器 甕	-	-	(3.3) 淡黄色	ナデ	ナデ	口縁	小片	
98	9	B区 12・13層	土師器 甕	-	-	(4.0) にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	口縁	小片	外面煤付着
99	9	B区 12・13層	土師器 甕	-	-	(3.8) にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	口縁	小片	外面煤付着
100	9	B区 12・13層	土師器 甕	(12.0)	-	(3.8) 浅黄橙色	口:ナデ 体:ケズリ	ナデ	口縁～体部	1/7	外面煤付着
101	9	B区 12・13層	土師器 甕	(13.0)	-	(5.2) 外:灰黄～にぶい褐色 内:浅黄～浅黄橙色	口:ナデ 体:ケズリ	ナデ	口縁～体部	1/6	
102	-	B区 12・13層	土師器 甕	(14.0)	-	(3.2) にぶい黄橙色	不明	不明	口縁	1/8	
103	-	B区 12・13層	土師器 甕	(15.0)	-	(3.6) 外:灰白～灰灰色 内:灰白色	不明	不明	口縁	1/9	
104	9	B区 12・13層	土師器 甕	(18.0)	-	(5.3) 外:褐灰色 内:浅黄褐色～褐灰色	口:ナデ 体:ケズリ	ナデ	口縁～体部	1/6	
105	-	B区 12・13層	土師器 甕	(20.7)	-	(3.7) 外:灰黄色 内:褐灰色	ナデ	ナデ	口縁	1/12	
106	-	B区 12・13層	土師器 甕	(18.7)	-	(4.5) 外:浅黄褐色 内:灰白～灰黄色	不明	ナデ	口縁	1/8	
107	9	B区 12・13層	土師器 甕	(20.6)	-	(6.2) 淡黄色	口:ナデ 体:ケズリ	ナデ	口縁～体部	1/8	

中期のものである。113は単純口縁の壺である。口縁は直線的に広がり、端部は丸くおさめられている。114・115は複合口縁の壺である。114は口縁小片であるが、端部は外方へ折り曲げられて、内面にもゆるい棱をなし、平坦面はやや内傾している。115は頸部のみであるが、羽状文が施されている116は壺の体部と思われる破片である。最大径になるであろう付近に羽状文と、斜行刺突文が施されている。113～115は古墳時代前期のものである。116も同様な時期のものであると考えられる。

117～127は鼓形器台である。全体的に筒部の縮約が進んだものである。117～119は受部口縁で、117は端部を丸くおさめ、118は端部に平坦面をつくっている。119は口縁端部が外反する大型のものである。120・121は受部下半部分の破片である。120は受部の開きが小さいので、やや器高のあ



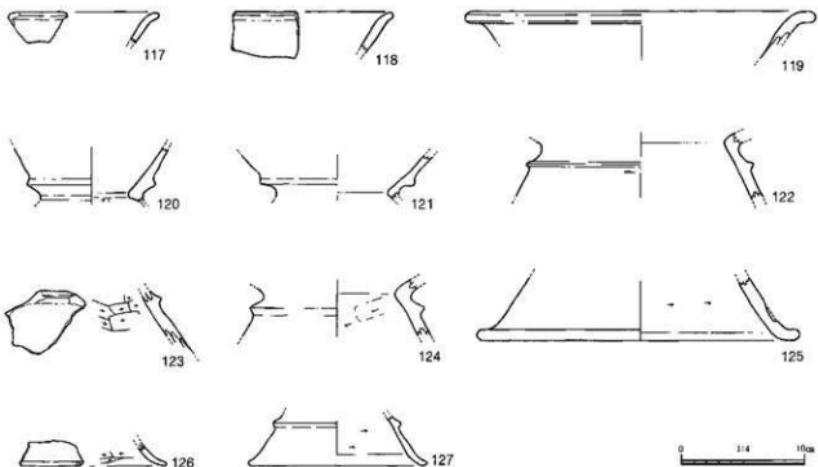
第24図 12・13層出土遺物 (3)

No	圖版	層位・地区	器種	法益(cm)		色調	調査		残存部位	残存率	備考
				口径	底径		内面	外面			
108	9	B区 12・13層	土師器 壺	-	-	(3.9) 外:灰青褐色 内:ぶい黄褐色	ナデ	ナデ	口縁	小片	
109	9	B区 12・13層	土師器 壺	-	-	(4.0) 浅黄色	口:ナデ 体:ケズリ	ナデ	口縁～体部	小片	
110	9	B区 12・13層	土師器 壺	(16.8)	-	(3.0) 外:浅青～褐色 内:浅青～黄褐色	ナデ	ナデ	口縁	1/8	
111	9	B区 12・13層	土師器 壺	(16.0)	-	(5.4) にぶい黄橙～灰黄褐色	口:ナデ 体:ケズリ	ナデ	口縁～体部	1/5	
112	9	B区 12・13層	土師器 壺	(17.2)	-	(4.8) 外:浅青～灰白色 内:灰白色	口:ナデ 体:ケズリ	口:ナデ 体:ハケ	口縁～体部	1/12	外面焼付着
113	9	B区 12・13層	土師器 壺	(16.0)	-	(9.5) 外:明褐色 内:浅黄褐色～ にぶい黄金色	口:ナデ 体:ケズリ	ナデ	口縁～体部	1/10	
114	9	B区 12・13層	土師器 壺	-	-	(5.0) 灰黄褐色	ハケ、ナデ	ナデ	口縁	小片	内面焼付着
115	9	B区 12・13層	土師器 壺	-	-	(5.3) 外:褐色 内:浅黄褐色	ナデ	ナデ	ヘラ抹工具による鉢底裏	1/5	
116	9	B区 12・13層	土師器 壺?	-	-	(8.5) 外:灰白色 内:褐色	ケズリ	ケズリ	斜行刺突文、 羽状文	体部	小片

るものであろう。121は筒部の縮約が進み、内面が稜線となっている。受部の開きも大きい。

122~124は脚部上半の破片である。122は大型のもので、123・124は器壁がやや厚いものである。125・126は脚部下半、126は脚部全体が残るものである。125も大型のもので、端部は外方へ曲がっている。119・122・125は胎土が似ている事から、同一個体の可能性がある。127はやや器高が高いものであろう。これらはおおむね弥生時代終末期~古墳時代前期のものである。

128~131は高壺である。128は円盤充填するもので、接合時の刺突痕が、底面に残っている。129は受部で口縁は直線的に広がる。130は脚筒部から屈曲し、聞く裾部をもつ脚部である。131も脚部で、裾部がハの字状に広がっている。128・129・131は古墳時代前期のものである。132~135は低



第25図 12・13層出土遺物 (4)

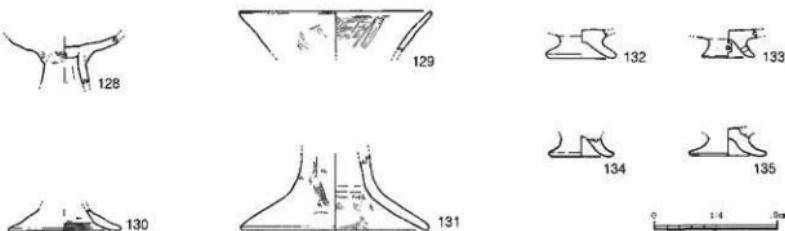
No.	図版	層位・地区	器種	寸法 (cm)			色調	調査			残存部位	残存半	備考
				口径	底径	器高		内面	外面				
117	-	B区 12・13層	土師器 波形器台?	-	-	(2.5)	外:浅黄色 内:にい黄褐色	不明	ナデ	口縁	小片		
118	9	B区 12・13層	土師器 波形器台	-	-	(3.2)	淡黄色	不明	不明	口縁	小片		
119	9	B区 12・13層	土師器 波形器台?	(2.75)	-	(4.0)	外:浅灰褐色 内:浅黄色	不明	不明	口縁	1/8		
120	-	B区 12・13層	土師器 波形器台	-	-	(4.5)	外:浅黄褐色 内:灰白色	受:不明 脚:ケズリ	不明	受下~脚上	1/8		
121	9	地区不明 12・13層	土師器 波形器台	-	-	(3.6)	外:深褐色 内:淡灰褐色	不明	ナデ	受下~脚上	1/4		
122	9	B区 12・13層	土師器 波形器台	-	-	(5.4)	浅黄~黄褐色	ナデ	ナデ	受下~脚上	1/8		
123	-	B区 12・13層	土師器 波形器台	-	-	(5.2)	外:灰黄色 内:浅黄色	ケズリ	ナデ	脚上半	小片		
124	9	B区 12・13層	土師器 波形器台	-	-	(4.6)	外:灰褐色 内:黄褐色	愛:ナデ 脚:ケズリ→ナデ	ナデ	受下~脚上	1/6		
125	9	B区 12・13層	土師器 波形器台	-	-	(26.0) (5.2)	にい黄褐色	ケズリ→ナデ	ナデ	脚部	1/8		
126	-	B区 12・13層	土師器 波形器台	-	-	(1.9)	にい黄褐色	ケズリ、ナデ	ナデ	脚端部	小片		
127	9	B区 12・13層	土師器 波形器台	-	-	(14.4) (4.2)	外:にい黄褐色 内:にい褐色	ケズリ、ナデ	ナデ	脚部	1/10		

脚環の脚部である。132は全体的に厚みがあり、脚端部は丸くおさめられている。133は脚端部が薄く引き出され、脚柱部には1円孔が穿孔されている。134・135は脚端部がハの字状に広がっているものである。これらの低脚環は占墳時代前期のものであろう。

S11は大型蛤刃石斧の破片である。表面は丹念に磨かれ、刃部がつくり出されている様子が伺える。S12は小型の砥石である。軟質の凝灰岩でつくられており、砥面はよく使われている。S13は用途不明品である。硬質の頁岩で、上面には擦痕が残り、一部打削を受けている。1側面は剥離しているが、2側面には敲き痕がみられる。前後関係はわからないが、敲き石・磨り石の転用品であろう。S14は花崗岩の凹石で、風化が激しい。

S15～S17は石鐵である。S15は平基式で長く、主要剥離面が大きく残る。S16は平面形が正三角形に近く、短い。先端・基端は鋭い。S17は上半が欠損しており、片面は大きく剥離している。平基式のやや鎌身の長いものだと考えられる。S18・S19は小型の楔形石器である。S18は両極に打撃痕が見られる。S20～S22は石核である。S20は安山岩、S21・S22は黒曜石である。S21は多方向からの打痕がみられる。S22は、ほぼ原礫のまま剥片剥離を始めたものと思われる。原礫面が多く残り、打撃痕が上面からのみであるから、多くの剥片は採られなかつたものと思われる。

12・13層出土石器で固化しなかつたものの総数は、黒曜石のものがスクレイバー1点、使用痕のある剥片3点、石核5点、剥片43点である。その他の石材は安山岩剥片1点、瑪瑙剥片1点、石種不明の原石1点である。



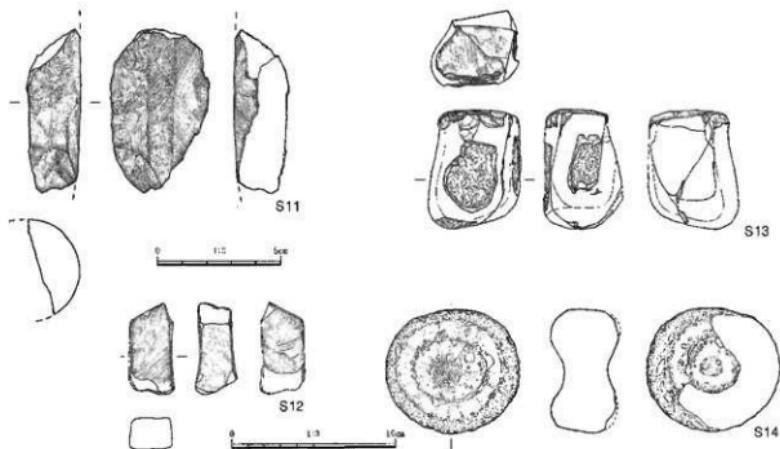
第26図 12・13層出土遺物 (5)

No	図版	層位・地区	器種	法量(cm) 〔口径 厚径 器高〕	色調	調査 内面	調整 外面	残存部位	残存率	備考
128	9	B区 12・13層	土器器 高环	- (4.0)	外:淡黃灰色 内:淡灰色	坏:不明 肉:ナデ	ハケ	受下～ 脚筒部	1/2	环底面に脚接合 時の剥離痕あり
129	-	B区 12・13層	土器器 高环	- (15.6) (3.4)	外:にぶい褐色 内:褐色	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ ナデ	受部	1/8	
130	9	B区 12・13層	土器器 高环	- (9.1) (1.8)	外:暗褐色 内:にぶい黄褐色	ケズリ、ハケ	ミガキ	脚部	1/4	
131	9	B区 12・13層	土器器 高环	- (15.0) (6.2)	外:淺黃褐色 内:褐色	ハケ、ナデ	ハケ 指頭圧痕	脚部	1/8	
132	-	B区 12・13層	土器器 低脚环	- (5.8) (2.3)	外:浅黄色 内:黄灰～浅黄褐色	ナデ	ナデ	脚部	1/2	
133	-	B区 12・13層	土器器 低脚环	- (4.3) (2.2)	外:浅黄褐色 内:にぶい褐色	ナデ	ナデ	脚部	1/2	脚部に1円孔
134	9	B区 12・13層	土器器 低脚环?	- (5.2) (1.5)	褐色	ナデ	不明	脚部	1/1	図示の 1/1
135	9	B区 12・13層	土器器 低脚环	- (6.2) (2.3)	淡黄褐色	ナデ	'ナデ'	脚部	3/4	

その他の層位の出土遺物（第29図、図版10）

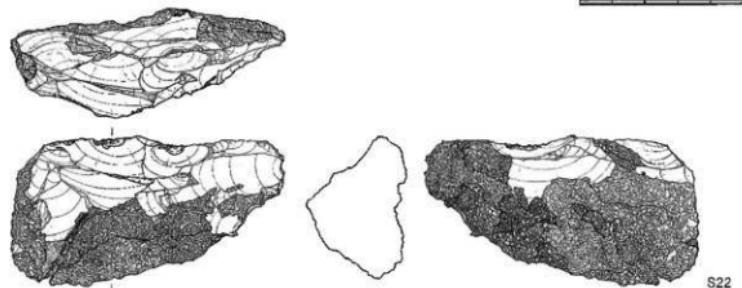
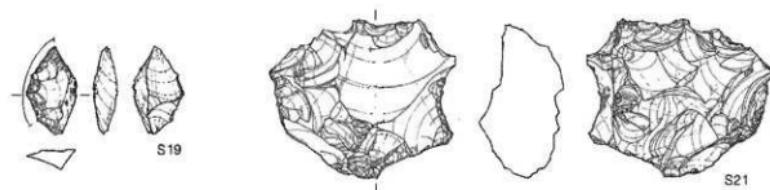
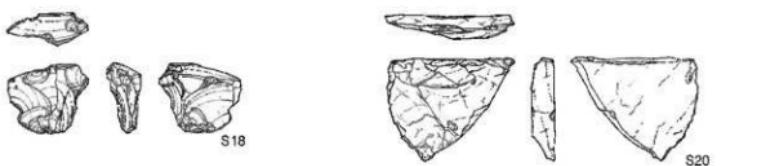
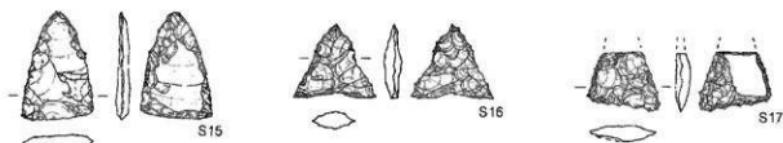
調査地内の擾乱内や、排土中、壁面精査中に出土したもので、出土層位がわからないものである。出土地がわからないものの石器の総数は、黒曜石のものが、使用痕のある剥片2点、石核1点、剥片1点である。その他の石材のものは瑪瑙剥片が1点ある。

136は大型の須恵器壺の口縁部で、端部は内面の稜から屈曲して立ち上がっている。口端部下に断面三角形の凸帯をめぐらし、その下に模描きの波状文を施す。5世紀末頃のものと思われ、調査地内では当該期の他の遺物がないため、混入である可能性が高い。137は壊と思われる底部で回転糸切り痕が残る。138～140は土師器の皿である。138・139は同一・擾乱土内からの出土で、口縁や内



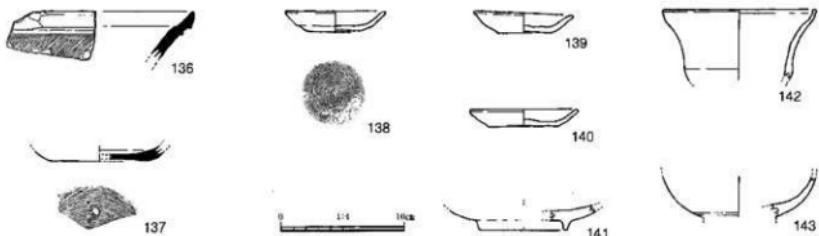
第27図 12・13層出土遺物 (6)

No.	図版 層位・地区	種別	法量(cm)				材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)		
S11	B区 10 12・13層	磨製石斧	(6.7)	(2.2)	(3.7)	66.52	塩基性片岩	熱刃石斧破片
S12	C区 10 12・13層	砥石	(5.5)	2.5	2.4	34.63	凝灰岩	破片
S13	不明 10 12・13層	不明石製品	7.3	5.5	(4.8)	288.37	頁岩	上面擦痕・剥離
S14	地区不明 10 12・13層	凹石	7.5	8.1	4.2	370.09	花崗岩	
S15	C区 10 12・13層	石錐	2.2	1.4	0.3	0.92	黒曜石	
S16	C区 10 12・13層	石錐	1.5	1.6	0.4	0.54	黒曜石	
S17	C区 10 12・13層	石錐	(1.2)	1.9	0.3	0.49	黒曜石	先端部欠損
S18	C区 10 12・13層	楔形石器	2.1	2.4	1.0	3.28	黒曜石	
S19	B区 10 12・13層	楔形石器	2.7	1.5	0.7	1.63	黒曜石	
S20	B区 10 12・13層	石核	3.2	3.9	0.7	8.99	安山岩	
S21	B区 10 12・13層	石核	4.8	5.4	2.3	60.26	黒曜石	
S22	C区 10 12・13層	石核	6.0	10.8	3.7	221.42	黒曜石	



第28図 12・13層出土遺物 (7)

面に油煙痕が顯著に付着しており、回転ナデと糸切り痕も明瞭にみられる。埋土中の不純物と思われる付着物が全体を覆うように付いている。近世のものであろう。140は内底面にわずかに油煙痕が付着している。摩滅が激しいが底面にはかすかに回転糸切り痕が認められる。141は磁器碗底部で、見込みには蛇の目釉剥ぎがみられる。釉はやや青緑がかった白色で、高台邊付には釉が施されていない。肥前系のものと思われる。142は陶器の鉢と思われるものである。口縁はやや湾曲しており、外面は褐色、内面は明るめの黄褐色の釉が施されている。143は陶器の碗で、外面の高台部直上に、釉を施す前に2本の細い沈線をめぐらしている。141~143は近世の所産であろう。



第29図 遺構外出土遺物

No	閑版	層位・地区	器種	法量(cm)			色調	内面	外縁	残存部位	残存率	備考
				口径	底径	器高						
136	10	層位不明	須恵器	—	—	(4.0)	灰色	ナデ	ナデ 口縁:波状文	口縁	小片	
137	10	層位不明	壺	—	—	(8.0)	(1.2)	灰色	ナデ	ナデ 底:糸切	底部	1/4
138	10	D区 擾乱内	上部器	8.2	4.5	1.7	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ 底:糸切	—	完存	灯明皿 内外面付着物有
139	10	D区 擾乱内	下部器	8.0	4.3	1.8	にぶい黄褐色	淡褐色	ナデ 底:糸切	—	完存	灯明皿 内外面付着物有
140	10	層位不明	土師器	(8.7)	(5.7)	1.4	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色~褐色	ナデ	ナデ 底:糸切	口縁 ~底部	1/4	灯明皿
141	10	D区 擾乱内	磁器 乗付碗	—	(7.2)	(2.0)	白色	見込み:蛇の目	箱ハギ	底部	1/6	肥前系?
142	10	D区 擾乱内	陶器 鉢?	(12.0)	—	(5.8)	外:褐色 内:黄褐色	—	—	口縁 ~体部	1/4	施釉
143	10	排土中	陶器 碗	—	—	(3.4)	灰オリーブ色	—	—	体部	1/6	施釉

A~E区出土石器集計表

石材	一 器 種	石 礫	石 礫 未 製 品	石 礫 製 品	不 明 品										
黒 理 石 安 山 岩	7	1	3	3	1	17	221	16	6	1	1	—	—	269	
瑪 瑙 岩	—	—	—	—	—	—	—	—	7	1	—	—	—	8	
貝 殻 灰 岩	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	
塗 基 性 片 岩	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	
花 崗 岩	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
不 明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
計	—	7	1	3	3	1	17	234	18	1	1	1	2	1	291

第5節 小 結

今回の調査の結果、溝・土壤・ピットの各遺構と3層の包含層が確認された。溝はすべて自然流路であり、土壤・ピットはその性格等は明らかにできなかった。包含層は、出土遺物から、12・13層がSD01埋没後～古墳時代中期の時期のものと考えられるのみで、7層・10層は包含されている遺物が広い時期にまたがる事から、時期を決定するまでには至らなかった。しかし、10層、12・13層に含まれる遺物の多くが滅している事から、これらの遺物は土砂と共に調査区外から流入してきたものと考えられる。よって、10層、12・13層は調査区外から流入してきた土砂の堆積層と考えられる。

また、調査地周辺の地形と、検出した溝の流水を合わせて考えてみると、本調査地は本来、北～東の方向に少し標高し、SD01がその一番谷部に位置していたと考えられる。そのため、10層、12・13層は調査地の北～東方向から流入してきたと推測できる。

しかし現在の地形ではA～E区はほぼ平坦で、調査区北端から立ち上がる緩やかな丘陵がみられる。そのため、A～E区は平坦面を作り出すために削平・造成がされた可能性が考えられる。C・D区壁面の土壌観察からは、その可能性が考えられるのは10層以上で、10層が本来は北に向かい堆積が厚かったが、一部削平され、8・7層土で造成を行ったのではないかと考えることができる。また、平坦面が作り出された理由は調査の過程で明確にできなかったものの、7層上面から遺構が検出できなかことから、耕作地としての利用を考えることができるであろう。

以上のことから、調査地内に堆積する上層の流入過程を推測してみると、まず調査地内遺構最古であるSD01がほぼ埋没した後、くぼみ状に残った箇所に、SD01を覆うように12・13層が上層が流入する。その後10層が調査地全体に流入する。10層に含まれる遺物の年代観には開きがみられる事から、数度に亘り流入した可能性も考えられる。その後、10層以上から削平・造成を受け、7層が形成され、耕作地としての機能を持ったと考えられる。

10層、12・13層の出土遺物、自然流路に含まれる遺物が、流れの上流になるであろう東側から流入してきていると考えられることから、当調査地の北～東方に、縄文時代後期～中世までの集落等の人間の活動痕跡が残る遺跡が埋没していることが考えられ、今後の調査に期待をしたい。

参考文献

- 松本芳雄1992「出雲・隠岐地域」「弥生土器の様式と編年」山陽・山陰編 木耳社
赤泽秀則1992『諒武地区Ⅴ-Ⅶ世紀墓塚整備事業発掘調査報告書5 南諒武草田遺跡』鹿島町教育委員会
鳥根県教育委員会1984『高庄遺跡発掘調査報告書-和田山遺跡工事に伴う発掘調査-』
松山智弘1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相一大東式の再検討」『鳥根考古学会誌 第8集』鳥根考古学会
松山智弘2000「小谷式再検討-出雲平野における新資料から-」『鳥根考古学会誌 第17集』鳥根考古学会
松山智弘2002「土器から見た出雲における前期古墳」『第30回山陰考古学研究会資料集 山陰の前期古墳』
山陰考古学研究集会
大谷光一1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『鳥根考古学会誌 第11集』鳥根考古学会
中村 浩1990『研究入門 須恵器』柏書房
廣瀬賛子編2005『吉田横穴墓群・島津古墳』松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団
九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年-九州近世陶磁学会10周年記念-』九州近世陶磁学会
江戸遺跡研究会編『岡山江戸考古学研究事典』柏書房

第4章 F区の調査

第1節 調査の方法

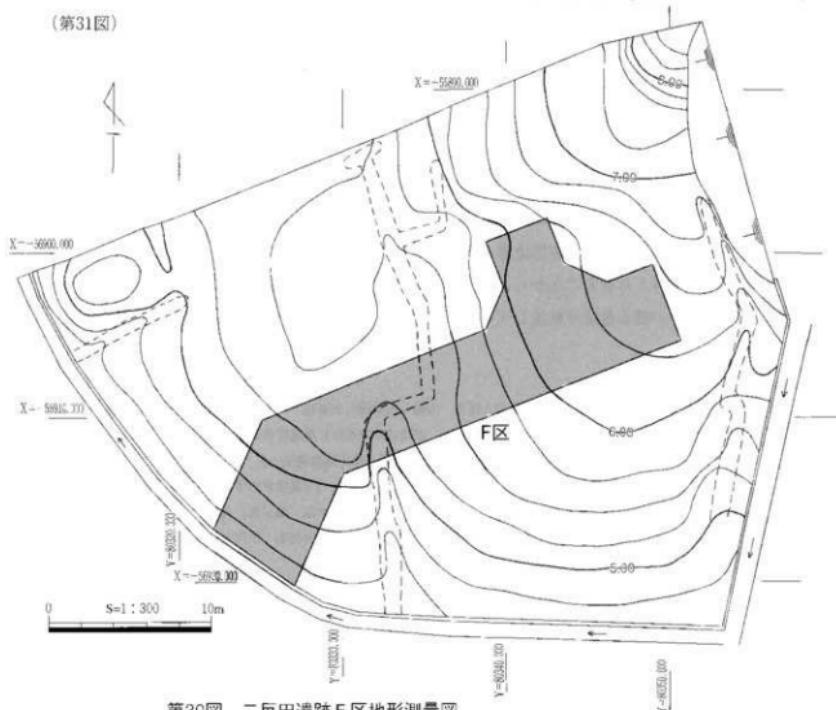
宅地造成地（第30図）の道路部分180m²について発掘調査を実施した。

試掘調査の結果で遺構面の深さがわかつていたため、まずは重機を利用して遺物包含層上面、場所によってはほぼ地山面まで掘り下げた。その後、人力による丁寧な遺物取り上げおよび遺構検出を行った。（江川「二反田遺跡F区概要報告書」より転載）

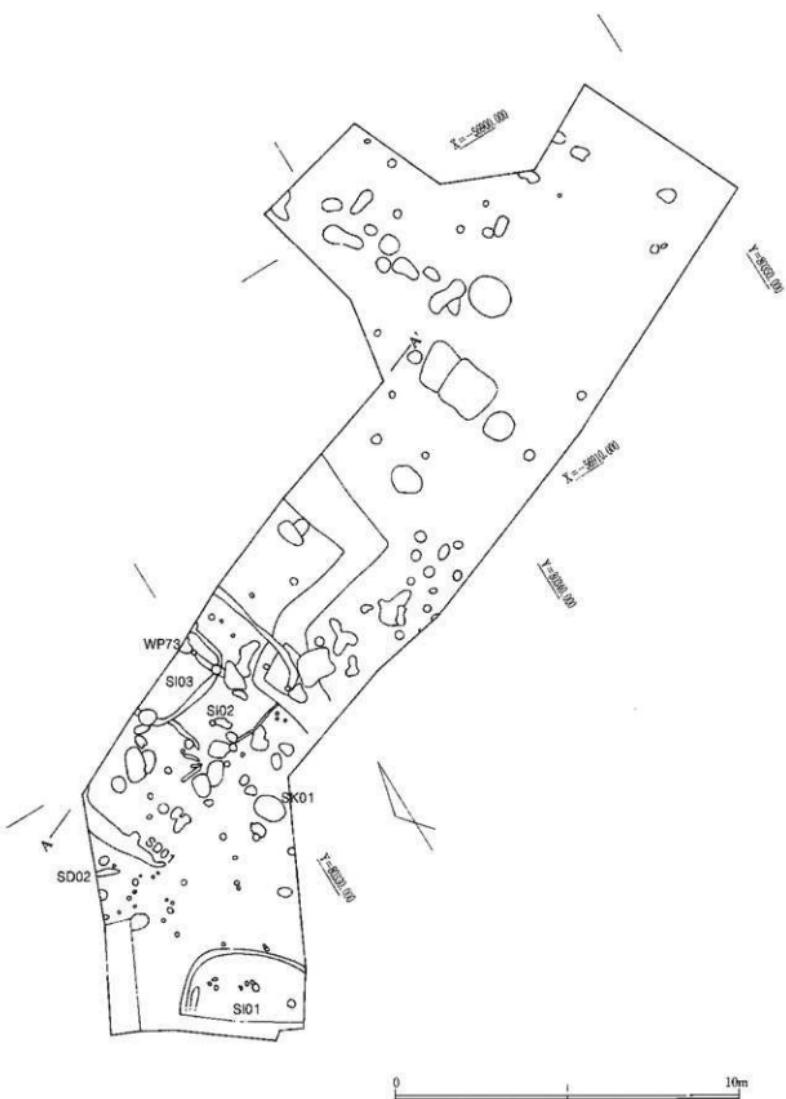
第2節 調査の概要

調査対象地の東側約三分の一については地山が浅く、現在果樹園として利用されている場所なので、積付け穴や肥料穴のような土塘の散在が見られた。いずれも遺物は出土しなかったが、地山を攪拌したようなやわらかい埋土が大半を占めていたので、比較的新しい時代のものと考えてよいであろう。

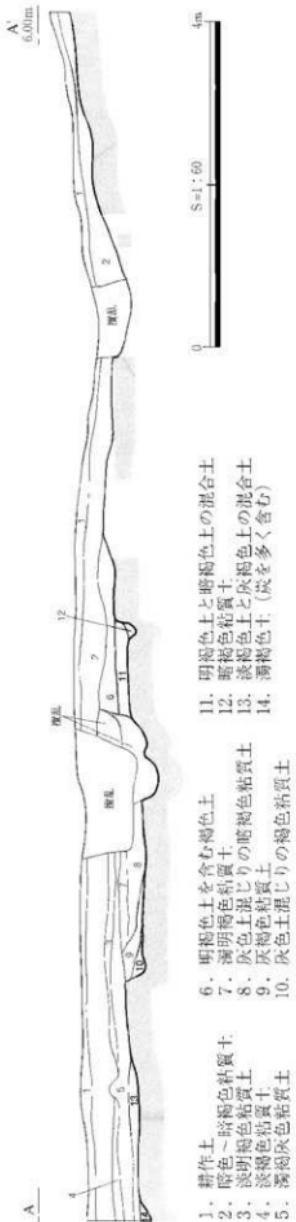
調査地の西寄りでは地山面までが深く、遺物包含層、弥生時代の遺構面が検出された。遺構の種類としては、円形の堅穴建物跡1棟、隅丸方形の堅穴建物跡2棟、溝2条、多数のビットがあった。（第31図）



第30図 二反田遺跡F区地形測量図



第31図 F区遺構配置図



F区北縁土層断面図

基本層序（第32図）

表土（畑の耕作土）の下には第2層褐色～暗褐色粘質土が10～30cmの厚みで堆積していた。第2層中には弥生土器片、奈良～平安頃の須恵器片、土師質土器片等を含んでいた。S I 0 2 近辺から東側ではこの土層の直下が明褐色粘質土の地山であった。S I 0 2 付近より西側では第2層の下に褐色系の土層が3層見られ、30cmの厚みを持ち、表土からは60cmの深さで地山に達する。これらの土層には土師器小片を含んでいた。建物跡や溝などの遺構はすべて地表面から検出した。S I 0 2、0 3 付近では遺構埋没後に上部が削平され、その後第6層、第7層が堆積した状況が見て取れる。

S I 0 1（第33図）

調査区最西端で、全体の約半分弱が検出された円形の堅穴建物跡である。

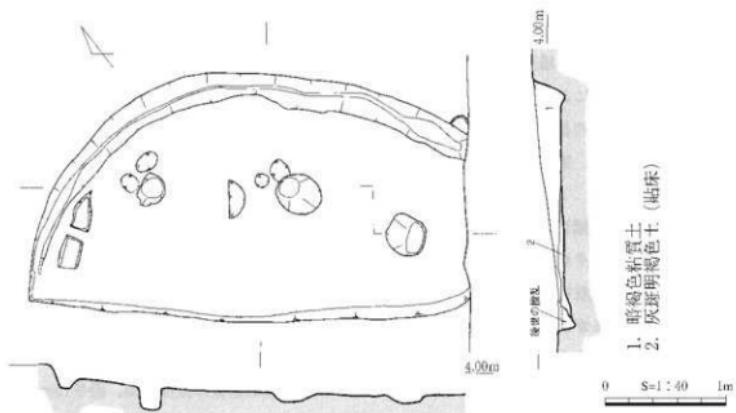
地形的には北東方向が高くなっている場所に位置しており、遺構の南西側は水路工事により搅乱を受けている。規模は上端直径を復原して径約4m前後と推定される。建物跡床面の標高は3.8～3.9mである。

堅穴の周壁は最大20cmの高さで残存しており、壁面に沿って幅18cm、深さ10cm程度の溝が掘られている。

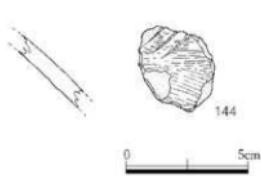
ピットは平面プランでは何ヶ所か確認したが、実際に掘り下げてみると断面が浅い鉢状を呈しており、柱穴らしいものは見当たらなかった。どのような上屋が造作されていたのかは不明である。

遺構内の埋土は暗褐色土1層である。2層の灰斑明褐色土は床面の南西側に見られる地山土を含む土層で、貼床をしていたことがうかがえた。

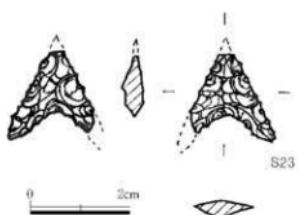
遺物は床面直上から黒曜石製の鐵1点（S44）が出土した。1は抉りの深い凹基式のもので、先端部と翼の一部を欠損している。やや浮いたレベルの埋土中からは炭や土器の細片も出土したが、土器は風化が著しくて器形を復原できるようなも



第33図 SI01実測図



第34図 SI01出土遺物実測図(1)



第35図 SI01出土遺物実測図(2)

のはほとんど無かった。唯一壺類の肩部と思われる小さな破片(144)があり、横方向のハケ目
の上に板目による斜め方向の施文がくりかえされるもので、弥生時代後期～占墳時代前期頃の遺物
と推定される。

この建物跡の時期については、平面プランが円形であること、床面に密着して石獣が出ていること
からこれまでの調査例により判断すれば弥生時代後期前葉以前のものと考えるのが妥当ではなか
ろうか。

No	図版	層位・地区	器種	法量(cm)			全 高	施 文		残存率	備考
				口径	底径	器高		内 面	外 面		
144	18	SI01	弥生土器 暗褐色粘質土 壺類	—	—	(3.6)	外: 淡褐色 内: 淡褐色	風化 調整不明	横方向のハケ 目	小片	板目による斜 め方向の施文

No	図版	層位・地区	器種	法量(cm)				材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)		
S44	18	SI01	床面上直上 凹基式石獣	1.8	1.7	0.35	0.8	黒曜石	尖端と翼の一方 を欠損

S I 02 (第36図)

S I 01 の北東約 7 m 場所に位置する、隅丸方形の竪穴建物跡である。

後世の削平や搅乱によって遺構の残存状況は悪かったが、その形状は何とか現在に残されていた。

規模は、南北方向の長さは北辺が調査区外になるため不明であるが、主柱穴の位置関係から推定 4 m はあると思われ、東西方向の長さは約 4 m である。残存する周壁の最大高は 20cm あり、床面の標高は 4.8m である。

東側の壁沿いには幅 15cm 前後、最深 8cm の溝が掘られていた。溝は他の辺にも掘られていた可能性が高いが、調査でそれを明確にすることはできなかった。

上層を構成する主柱は 4 本で、そのうち 3 本分の柱穴を検出した。柱穴は直径 23cm 程度とやや小さめに掘られているが、深さは 30cm 前後と深くしっかりしたものであった。

中央ピットは床面中央から若干南東寄りで検出した。竪穴建物跡 S I 03 と新しい時期の搅乱土壌によって切られており、一部分しか残存していなかった。復原法量は直径 40cm、深さ 13cm、断面鉢状を呈し、壌内部には炭が厚く遺存していた。また、このピットの南西側床面にも厚い炭の広がりが見られた。

建物跡の埋土は第 12 層と 13 層である。12 層には弥生土器壙片（148）、上師器片、黒曜石などを含む。13 層は壁体溝の埋土である。遺物は出土していない。

遺物は床面直上から鼓形器台（152）が掘わったままで出土したほか、壙（145～147）、小形高坏（150）の破片が散乱した状況で出土した。また、床面中央の炭の上から壙（149）の口頭部と高坏の坏部（151）が出土した。

145～147 号は壙の口頭部片である。いずれも複合口縁のもので、口縁部はやや反りながら長く伸び、端部はうすく引き出されるか丸く終わる。複合部の稜は水平に突出する。149 号は複合口縁を持つ壙の口頭部である。口縁部はやや反り気味に伸び、複合部は水平に突出する。150 号は小ぶりの坏部に大きく聞く脚部が付く高坏である。脚部には円孔を穿つ。151 号は高坏の坏部で、体部は丸みを持ちながら口縁部につながり、端部近くでわずかに外反する。坏底部には円盤が充填され、円盤外向中央には刺突痕が見られる。152 号の鼓形器台は完形に復元できたもので、上台径 23.4cm、筒部径 12cm、底径 19cm、器高 11.6cm を測る。縮約した筒部を持ち、筒部内向は稜をなす。稜線以下にはヘラケズリが施される。器壁は薄く、上台端部は外反する。

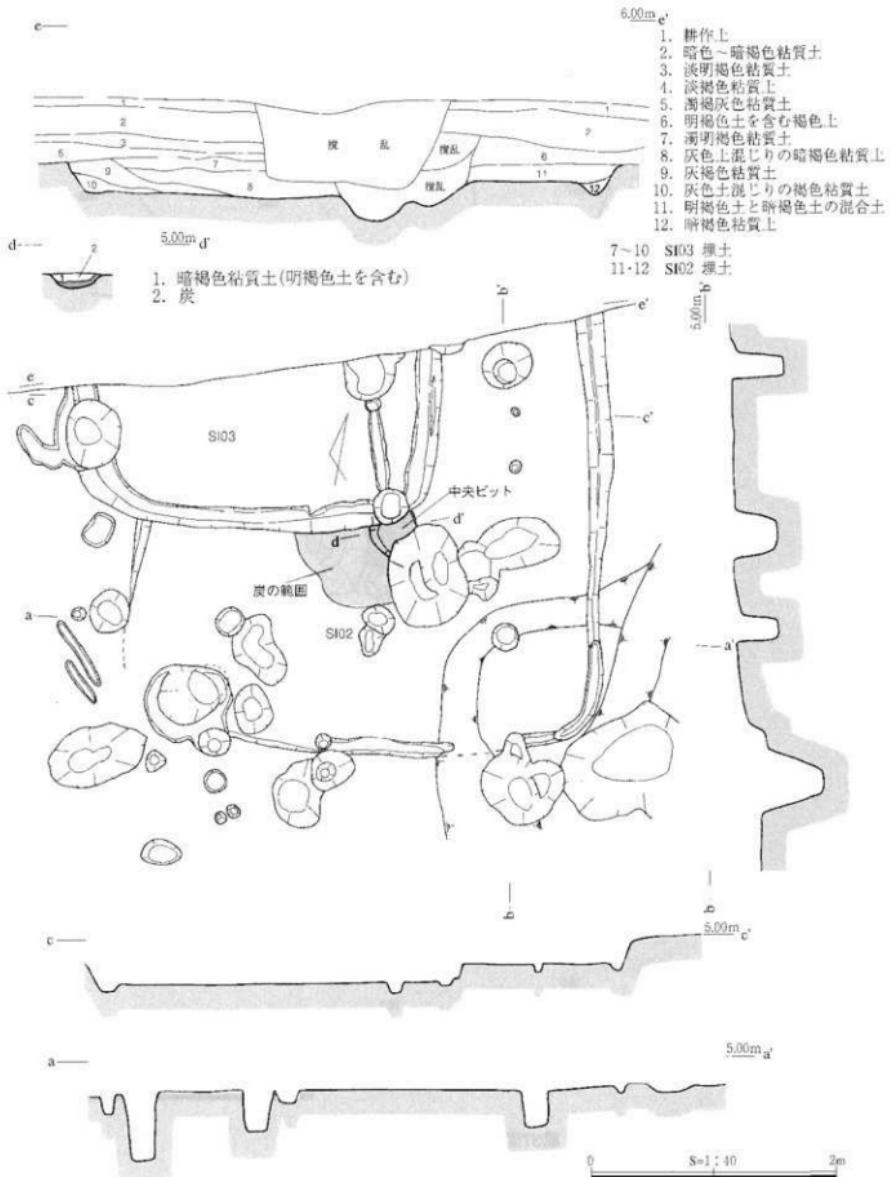
この建物跡の時期は、床面出土遺物の特徴から草田 5 期に併行し、弥生時代後期後葉と考えられる。

S I 03 (第36図)

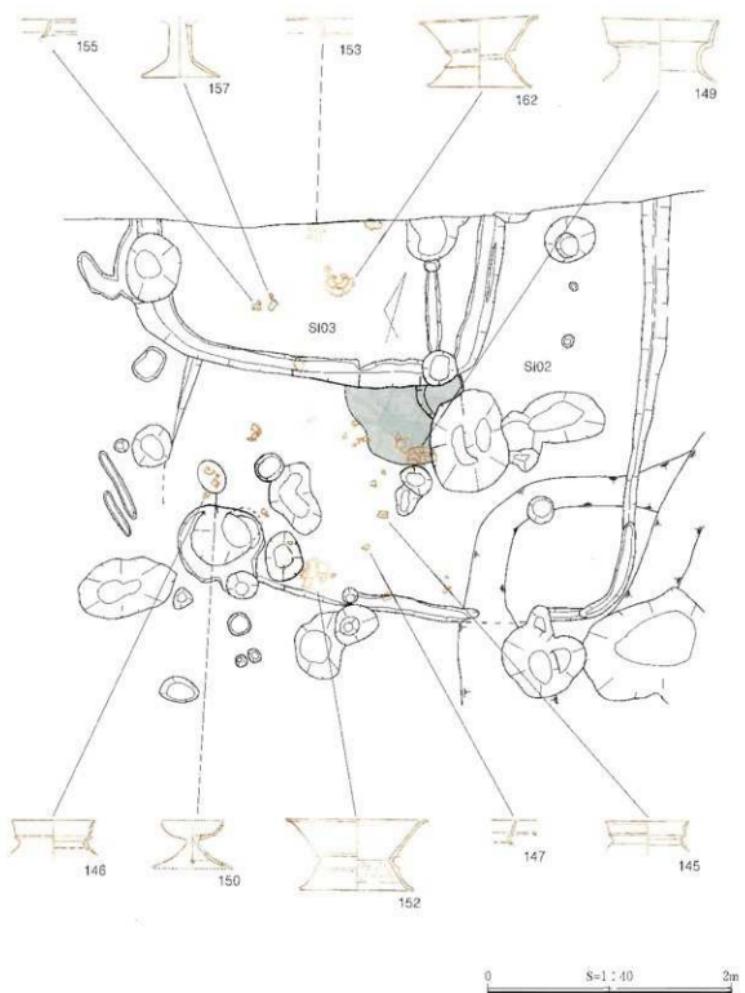
S I 02 の北西の床面を約 15cm 掘り下げて造られた、隅丸方形の竪穴建物跡と思われる。

規模は、東西の上端辺が 3 m と短いものであるが大半が調査区外にあるため全体の形状は定かではない。床面には壁に沿って幅 16cm 前後、深さ 4cm 前後の溝が掘られている。また東壁近くにも幅 10cm、深さ 2～3cm の浅い溝が見られた。柱穴は検出できず、どのような上屋があったのかは不明である。

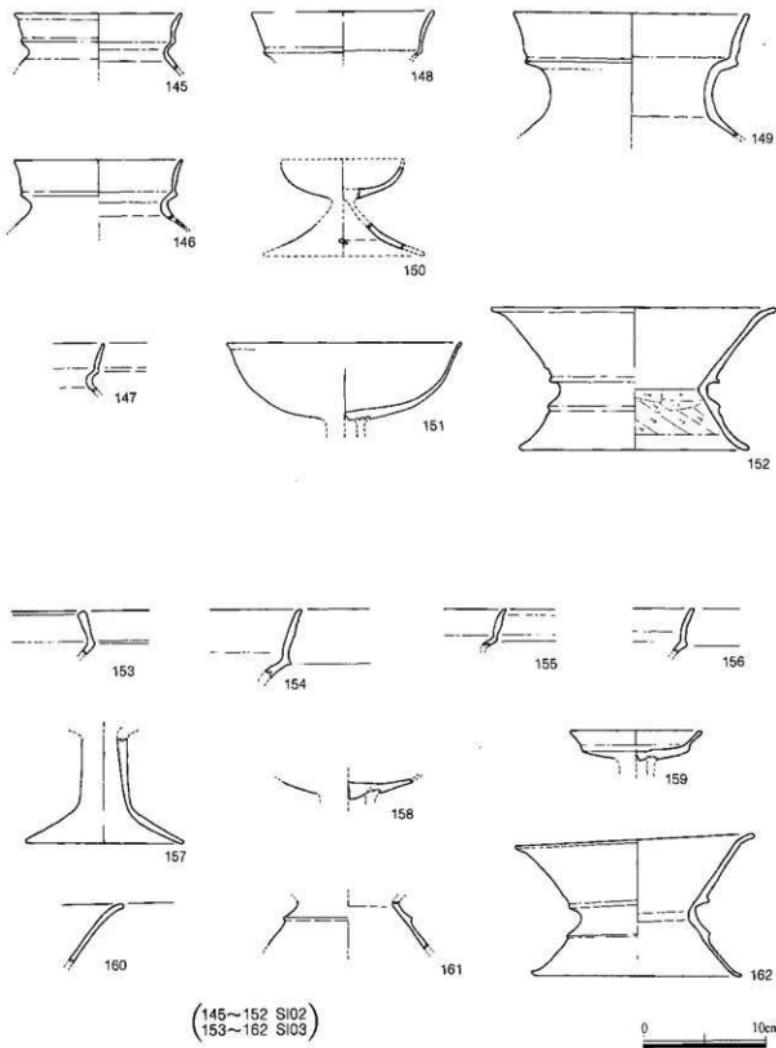
建物跡の埋土は第 7 層～10 層である。調査区北壁際における建物跡東壁の立ちあがりは後世の搅



第36図 SI02・03実測図



第37図 SI02・03遺物出土状況



第38図 SI02・03出土遺物実測図 (S=1:4)

乱により失われ、堆積土を明示できなかった。

遺物は床面直上から鼓形器台（162）が上下逆転して据わった状況で出土したほか、壺や壺の口縁部片（153、155）、高坏の脚部（157）も出土した。建物跡埋土中からは壺口縁部片（154）、壺口縁部片（156）、高坏部片（16）、鼓形器台片（160、161）などが出土地した。また、調査区内に水が流入するのを防ぐため調査区外に排水溝を掘った際、S I 0 3のエリア内と思われる所から小形器台（159）が出土したが出土層位は不明である。

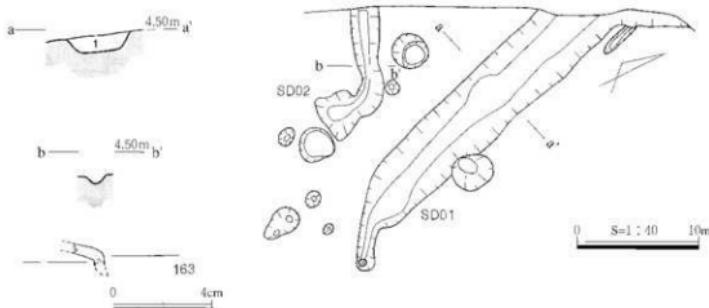
153は口縁部が内傾する複合口縁の壺で、複合部は水平に突出し、口縁端部は内傾する面を持つ。154も複合口縁の壺口縁部であるが、口縁部は外傾して長く伸び、端部は薄く引き出され、複合部は水平に突出する。155、156は複合口縁の壺で、口縁部は反り気味に伸び、端部が尖って終わるものと丸く終わるものがある。157は円筒状の筒部から「ハ」の字状に広がる高坏脚部である。158は高坏部片の破片で、外面上に刺突痕をもつ円盤が充填されている。159は小形器台の坏部で、体部と口縁部の境は稜をなし、口縁部は外反して伸びる。底部には刺突痕を持つ円盤が充填されている。160～162は鼓形器台である。160は上台部、161は筒部から下台部の破片、162は完形に復元できたもので、上台径19.5cm、筒部径9.4cm、底径17.1cm、器高11.6cmを測る。筒部は縮約し、内面に幅7mmほどの凸を持つの。風化により調整は観察できない。

この建物跡の時期は、床面の出土遺物の特徴から草山5期併行期の弥生時代後期後葉と考えられる。

S D01 (第39図)

S I 0 3から西へ3mの地点で検出した幅50cm強、深さ10cm前後の浅い溝で、やや曲がって調査区外に続いている。底面のレベルは北が高く南が低い。炭を多く含む埋土中には須恵器小片1片（21）を含む細かい土器破片が多数混入していた。21は口縁端部の下垂する壺蓋片と考えられるものである。

この溝の時期は、上記の須恵器1片を重視すれば奈良時代以降に機能していたと考えられるが、上層の第5層や13層に須恵器が全く出土していないことから、根や小動物の搅乱による混入物の可



第39図 SD01・02実測図・出土遺物実測図 (S=1:4)

能性も考えられ、時期不明の遺構としておく。

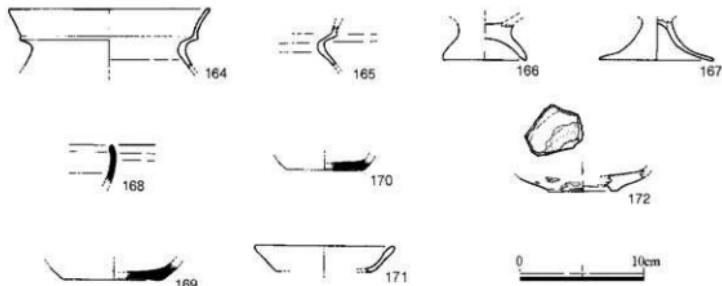
S D 02 (第39図)

S D 01 西側で検出した幅25cm前後、深さ10cmの溝で、調査区外に続いている。遺物は出土しなかつた。

No.	図版	層位・地区	器種	法量(cm)			色調	調内	調外	外面	残存率	備考
				口径	底径	器高						
145	18	SI02 床面	弥生土器 甕	(13.6)	(4.3)	外:白褐色 内:白褐色	脇部:ケズリ	風化 調整不明	風化	1/4	—	—
146	18	SI02 床面	弥生土器 甕	(13.6)	—	(4.9)	外:淡褐色 内:淡褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	1/6	—	—
147	18	SI02 床面	弥生土器 甕	—	(4.0)	外:淡褐色 内:淡褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	風化	小片	—	—
148	18	SI02 埋土	弥生土器 甕	(14.5)	—	(4.0)	外:暗褐色 内:淡褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	1/8	—	—
149	18	SI02 床面	弥生土器 甕	19.1	(10.0)	外:灰白色 内:灰白色	口縁:横ナデ	口縁:ヨコナデ	口縁:ヨコナデ	口縁部 1/2残存	—	—
150	18	SI02 床面	弥生土器 高环	(10.0)	—	—	外:白褐色 内:白褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	受部1/4	脚部に円孔	—
151	18	SI02 床面	弥生土器 高环	(19.0)	—	(6.3)	外:淡明褐色 内:淡明褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	2/3	脚部2/3	—
152	18	SI02 床面	弥生土器 鼓形器台	23.4	19.0	11.6	外:灰褐色 内:灰褐色	F台部ヘラケズ リ、ヨコナデ	風化 調整不明	風化	2/3	—
153	19	SI03 床面	弥生土器 甕	—	(3.6)	外:黑色、淡橙褐色	風化	風化	風化	小片	—	—
154	19	SI03 埋土	弥生土器 甕	—	—	(5.6)	内:淡灰色	調整不明	調整不明	—	—	—
155	19	SI03 床面	弥生土器 甕	—	—	(3.0)	外:白褐色	風化	風化	小片	—	—
156	19	SI03 床面	弥生土器 甕	—	—	(3.6)	外:淡褐色	風化	風化	小片	—	—
157	19	SI03 床面	弥生土器 高环	—	(12.9)	8.8	外:白褐色 内:白褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	1/3	—	—
158	19	SI03 埋土	弥生土器 高环	—	—	(1.5)	外:白褐色 内:淡灰色	風化 調整不明	風化 調整不明	1/6	充填部外面に 剥突痕	—
159	19	SI03内 層位不明	弥生土器 小型器台	—	—	10.8 (2.3)	外:白褐色 内:白褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	4/5	充填部外面に 剥突痕	—
160	19	SI03 埋土	弥生土器 鼓形器台	—	—	(4.8)	外:淡褐色 内:白褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	小片	—	—
161	19	SI03 埋土	弥生土器 鼓形器台	—	—	—	外:淡褐色 内:灰白色	風化 調整不明	風化 調整不明	小片	—	—
162	19	SI03 床面	弥生土器 鼓形器台	19.5	17.1	11.6	外:淡褐色 内:淡褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	1/2	—	—
163	—	SD01 埋土	須恵器 甕	—	—	(1.4)	外:灰褐色 内:淡灰色	風化 調整不明	風化 調整不明	細片	—	—

遺構外の出土遺物（第40図）

164は調査K外の排水溝掘削時に出土した複合口縁の壺で、口縁部は外反して伸び、壺部は薄く引き出される。165も同様のものと思われるが、口縁端部を欠損している。166は低脚壺の脚部と思われるもので、壺底部の器壁は厚く、「ハ」の字状にふんばる。165、166は搅乱土壌W P73（第31図）から出土した。167は土師器の高脚脚部で、脚高は低いが脚端に向かって大きく開く。168は須恵器の壺口縁部片で、内湾して端部に至り、内面の端部近くが肥厚する。169は回転糸切り痕のある須恵器底部片である。これら167～169は第2層褐色粘質土から出土した。170は搅乱土壙S K 0 1（第31図）から出土した須恵器壺底部片、171はS I O 2 東側の搅乱土壙から出土した土師質土器皿で、底部には回転糸切り痕が見られる。172は表採した肥前陶器の底部片で、砂口積みの痕跡がある。高台は削り出され、露胎である。疊付には糸切り痕が残る。施釉部分は乳白色を呈する。以上の遺物の時期は、164～166は弥生後期後葉、167は古墳時代、168～170は奈良・平安時代、171は中世、172は近世初め頃のものと思われる。



第40図 遺構外出土遺物実測図 (S=1:4)

No.	図版	層位・地区	器種	法 量(cm)		色 調	調 整		残存率	備 考
				口径	底径		内面	外面		
164	20	遺構外 排水溝掘削時 素	弥生土器	(16.4)	—	(4.7) 外:灰白色 内:灰白色	風化 調整不明	風化 調整不明	1/8	—
165	-	遺構外 素	弥生土器	—	(3.4)	外:淡褐色 内:淡褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	小片	—
166	20	遺構外 搅乱土壙 素	弥生土器 底脚	—	(6.7) (2.9)	外:淡褐色 内:淡褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	3/4	—
167	20	遺構外 褐色粘質土 素	上節唇	—	(9.2) (4.1)	外:灰褐色 内:橙褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	1/2	—
168	20	遺構外 褐色粘質土 壺	須恵器	—	(3.2)	外:灰白色 内:灰白色	風化 調整不明	風化 調整不明	小片	—
169	20	遺構外 褐色粘質土 壺	須恵器	—	(8.0) (1.4)	外:灰白色 内:灰白色	回転ナデ ナデ	底部回転糸切 り	1/4	—
170	20	遺構外 搅乱土壙 壺	須恵器	—	(6.2) (1.0)	外:灰白色 内:灰白色	回転ナデ	底部回転糸切 り	1/5	—
171	20	遺構外 搅乱土壙 素	土師質土器	(11.3)	—	(2.2) 外:淡褐色 内:淡灰褐色	回転ナデ	回転ナデ、底 部回転糸切 り	1/8	—
172	20	遺構外 表採	肥前陶器 底部	—	(5.6) (1.8)	外:乳白色 内:褐色	砂口積 施釉	回転ナデ、疊 付に糸切り痕	1/5	釉は乳白色

第3節 小 結

二反田遺跡F区では、弥生時代の竪穴建物跡3棟分を検出した。2棟は弥生時代後期後葉のもの、1棟はそれよりも遅る後期前葉以前のものと考えられる。

円形の竪穴建物跡S I 01は、床面から土器が出土していないため確定な時期は不明であるが、平面プランが円形であること、床面直上から石鐵が出土していることからみて、弥生時代後期後半まで下る可能性は低いであろう。

隅丸方形の竪穴建物跡S I 02は、4本柱と中央ピットを備える典型的な竪穴建物跡であった。広い炭の広がりを確認し、床面直上からは草山編年5期併行の土器が出土したことにより、弥生時代後期後葉の住居であったと考えられる。竪穴建物S I 03は、S I 02の床面から掘り込まれた、規模の小さな竪穴建物である。2棟の建物跡の関係を遺物面から観察するため、床面から出土した土器、特に両者から完形で出土した鼓形器台を観察したところ、双方にはほとんど形状的な違いを見出すことができなかった。したがって、S I 02がうち捨てられた後、S I 03はあまり時を経ずして、ほぼ同じ場所に建替がおこなわれたことが明確となった。

二反田遺跡A～E区では、非常に幅広い時期の大量の遺物が出土していることから、F区でも幅広い時期の遺物・遺構が検出できるのではないかと期待されたが、上記の建物遺構以外に時期の確定できる遺構はなく、包含層の出土遺物も少量にとどまった。F区の東側では浅い堆積土のドから地山が一度削平されたような状況で出土したことから、もしそこに幅広い時代の遺構が存在していたとしてもそれは既に失われてしまっているであろう。(瀬古)

<参考文献>

島根県庵原町教育委員会『市謫武草田遺跡』1992年。

第5章 総括

調査地は春日町田原谷池の西側に隣接する水田と北側に続く畠の中に位置する。

現況が水田であったA～E区の調査では、遺構として円形土壙2基とピット群、自然流路9条を検出し、縄文後期を初源として、中世に至るまでの土器類を中心とした広範な遺物が多量に出土した。堆積層からは少なくとも中世以降に水田を造成した状況が見られ、おそらくこの時に上部を削平された円形土壙やピット群などの遺構は、機能していた時期の判断が困難であった。また、調査区南寄りを東西に走る自然流水路埋没後、付近一帯に形成された弥生終末期～古墳時代中期の遺物包含層からは、摩滅の進んだ土器類が多量に出土し、周辺に多くの遺構が埋まっていることが推測された。

このことは、開発範囲の拡大により追加調査したF区で証明されることになった。F区はA～E区の北側にある緩傾斜の畠の一部に設けられた調査区で、弥生時代終末期の堅穴建物跡2棟とそれよりも遅い時期の円形堅穴建物跡1棟が検出されたのである。弥生終末期の堅穴建物の床面では鼓形器台が据えられた状態で出土した。鼓形器台は弥生後期～古墳前期の埋葬に関わる遺構で出土することがよく知られているが、住居跡の中で出土する例も安来市の塩津丘陵遺跡群では多くあるようである。他に、包含層の出土遺物としては古墳時代～中世の土器類が若干見られた。

田原谷池については、明治10年の山雲島根郡春日村誌に「東西巻町二十四間南北巻町七間」(内田暎『法吉村誌』より)とあり、現在の東西長(約137m)から見ると現在よりも若干大きな用水池であったらしい。原始・古代の状況は記録もなく窺い知ることはできないが、今回の調査区で出土した遺物の量や遺存状況から見て、上流側にある田原谷池周辺で生活の痕跡が発見される可能性は高く、今後の調査が期待される。(瀬古)

＜参考文献＞

- 鳥根県教育委員会『塩津丘陵遺跡群』1998年
内田 暎『法吉村誌』昭和63年

図 版



1. A～D区調査前全景（南東から）

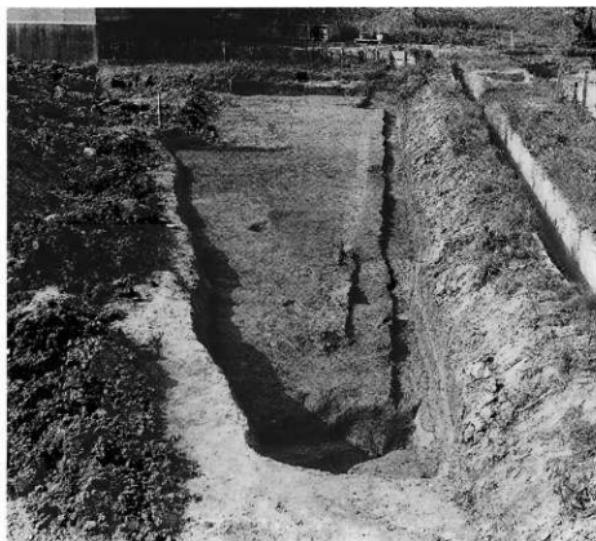


2. A～D区完掘全景（南東から）

図版2 A～E区



1. A～D区完掘全景（南から）



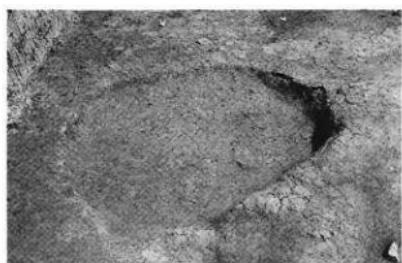
2. E区完掘全景
(南から)



1. SK 01 土層断面 (南から)



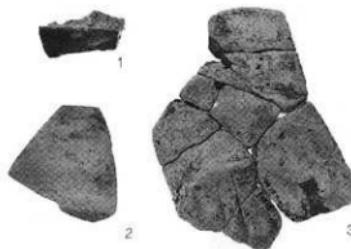
4. SK 02 上層断面 (北から)



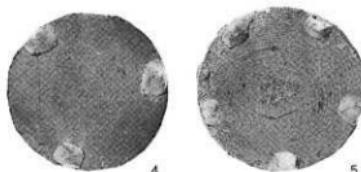
2. SK 01 完掘状況 (南から)



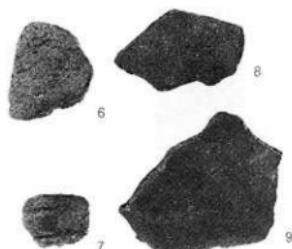
5. SK 02 完掘状況 (南東から)



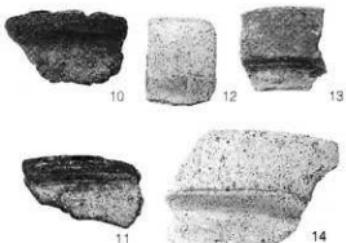
3. SK 01 出土遺物



6. SK 02 出土遺物



7. SD 01 出土遺物



8. SD 02・04 出土遺物

図版4 A～E区



1. SD 01～SD 08
完掘状況（東から）



2. SD 01～SD 08
完掘状況（西から）



3. SD 01 A-A'
土屑断面
(西から)



1. SD 01 D区西壁面
土層断面
(北東から)



2. SD 02 完掘状況
(南東から)



3. SD 02 土層断面 (南西から)



4. SD 03・04 完掘状況 (西から)

図版6 A～E区



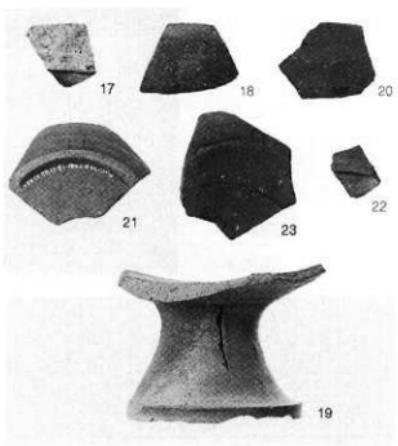
1. D区ピット完掘状況（北西から）



2. P10土層断面（南から）



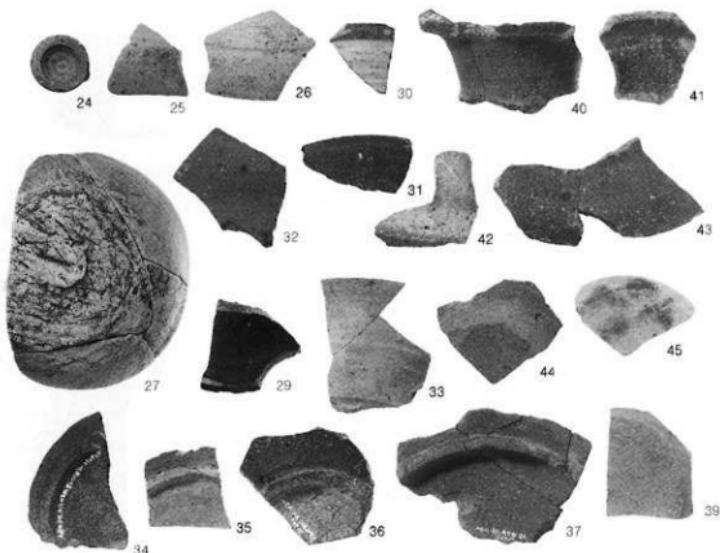
3. P13土層断面（南から）



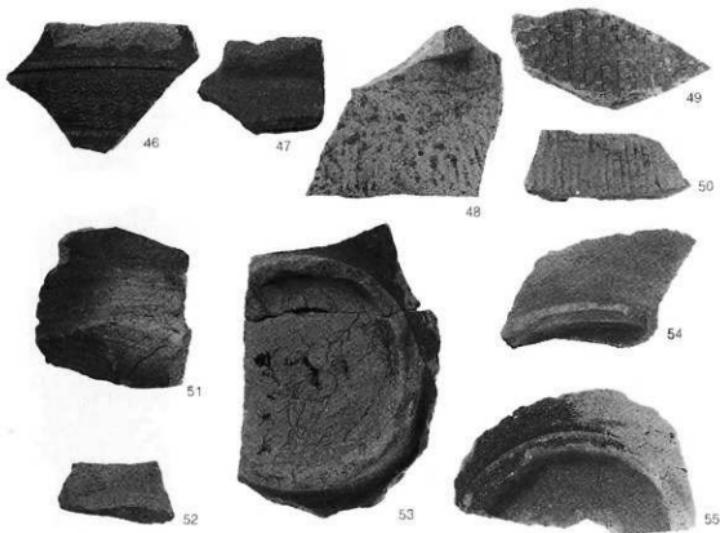
5. 7層出土遺物



4. ピット出土遺物

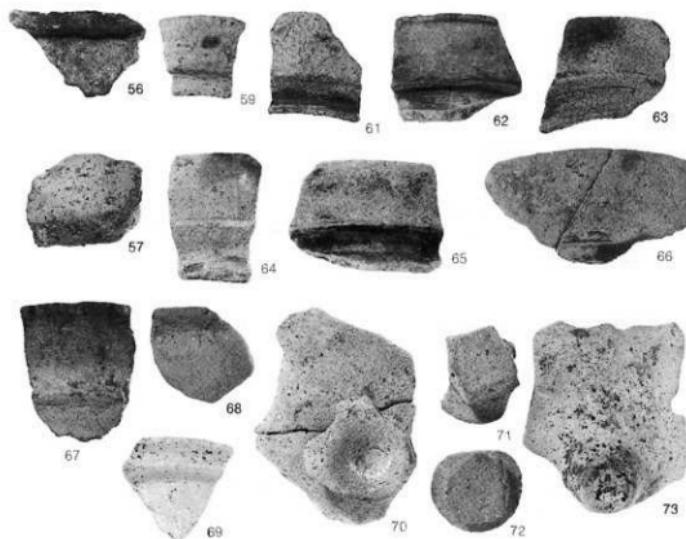


1. 10層出土遺物 (1)



2. 10層出土遺物 (2)

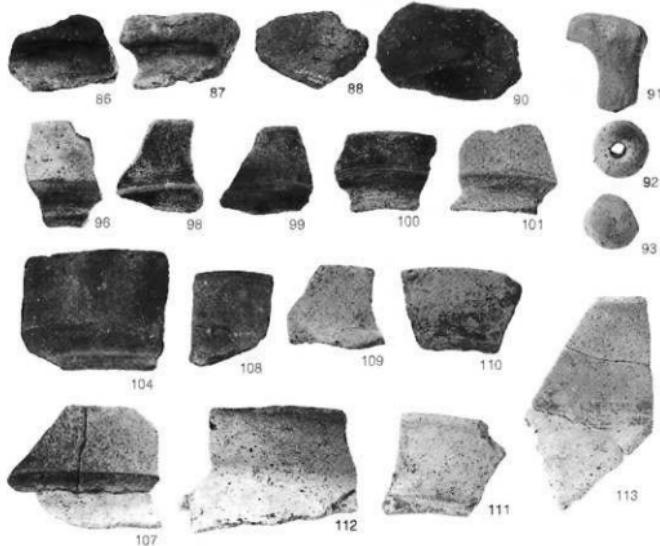
図版8 A～E区



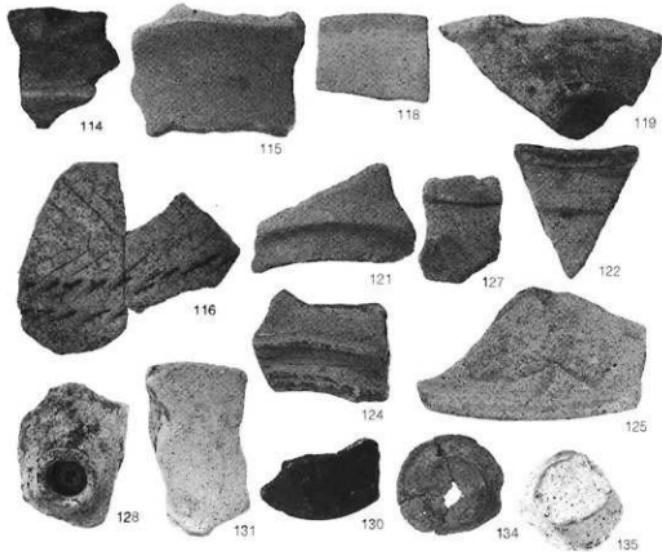
1. 10層出土遺物 (3)



2. 10層出土遺物 (4)

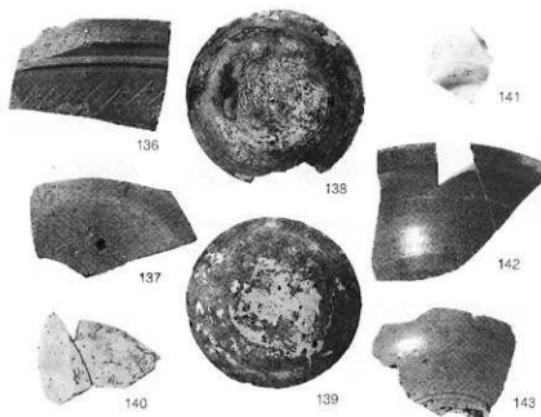


1. 12・13層出土遺物 (1)

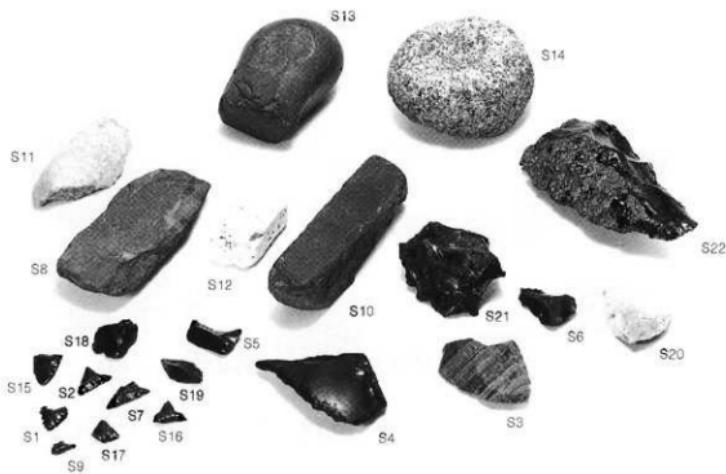


2. 12・13層出土遺物 (2)

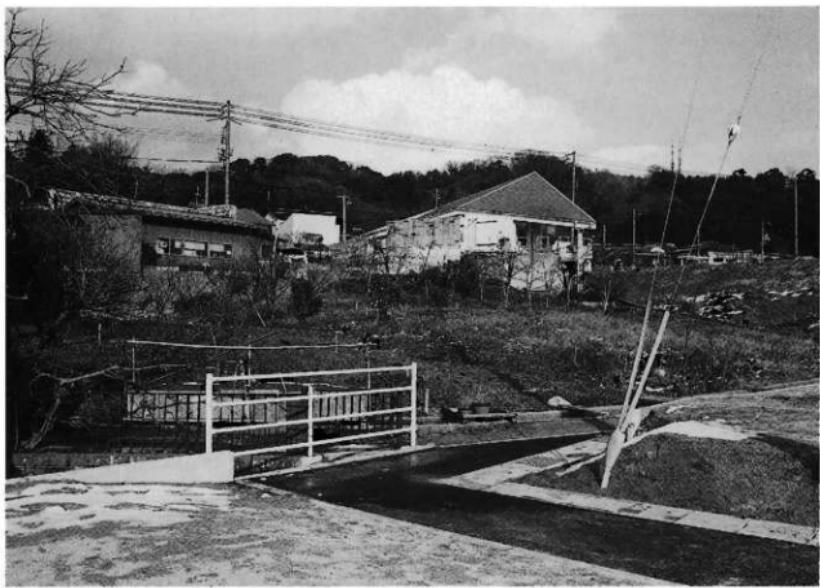
図版10 A～E区



1. 遺構外出土遺物



2. A～E区出土石器



1. F区調査前近景（南西から）



2. F区南西側調査後（南西から）

図版12 F区



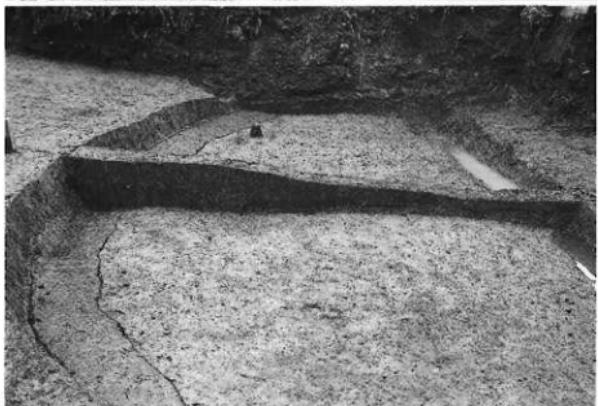
1. F区東側調査後（南西から）



2. F区SI 02・03完掘状況

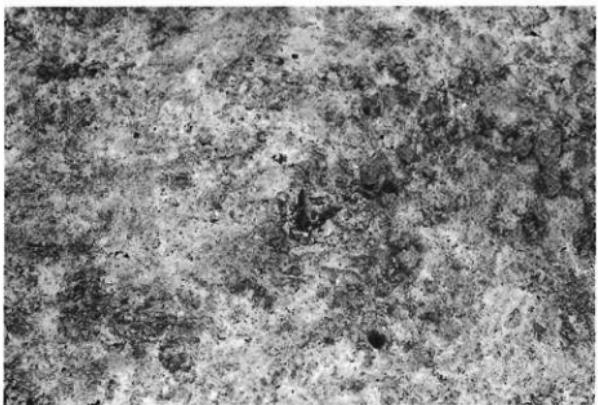


1. F区SI 01 検出状況



2. F区SI 01 土層

堆積状況



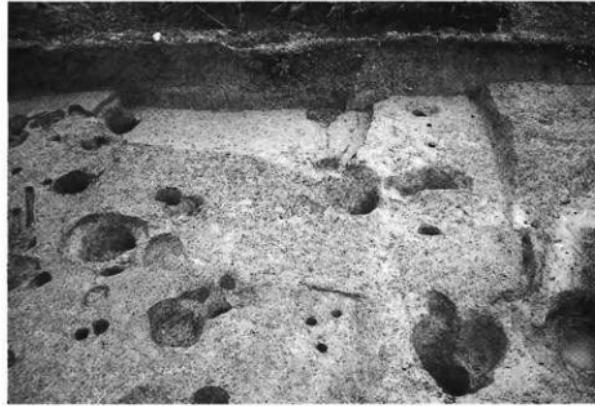
3. F区SI 01

遺物出土状況（石器）

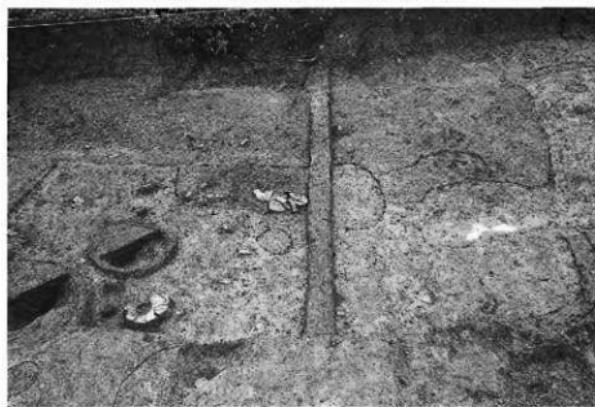
図版14 F区



1. F区SI 01 完掘状況
(南西から)



2. F区SI 02 完掘状況
(南から)



3. F区SI 02 滝構・
遺物検出状況



1. F区S102 中央ピット
土層断面



2. F区S102 高杯
出土状況



3. F区S102 鼓形器台
出土状況

図版16 F区



1. F区SI03完掘状況
(西から)



2. F区SI03遺構・遺物
出土状況



3. F区SI03鼓形器台
出土状況



1. F区 SI 03 高杯(脚部)
出土状況



2. F区 SD01・02
完掘状況（南から）



3. F区発掘作業風景

図版18 F区



144



145



147



S23



146



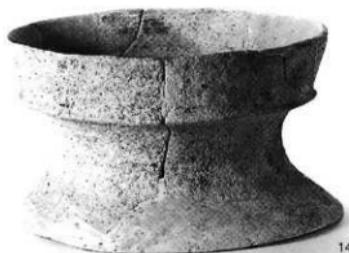
148



150



151



149



152

144, S23; SI01出土

145~152; SI02出土



153



155



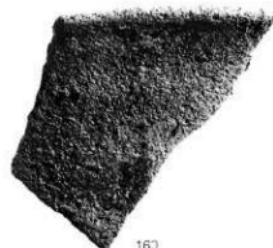
154



156



158



160



157



161



159



162

153~162; SI03出土

図版20 F区



164



166



167



168



169



170



171



172

164～172：造構外出土

報告書抄録

ふりがな	にたんだいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	二反田遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	松江市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第107集							
編著者名	飯塚康行、廣濱貴子、三木雅子、瀬古諒子							
編集機関	松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団							
所在地	〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL: 0852-55-5294 〒690-0886 島根県松江市母衣町180-21 TEL: 0852-28-2065							
発行年月日	2006年(平成18年)8月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
島根県					20050701			
二反田遺跡	松江市 春日町	32201	K63		~20050831			民間宅地造成
					20060112			
					~20060201			
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
二反田遺跡	集落 散布地	弥生終末期 古墳前～中期 奈良～中世	竪穴住居跡 円形土壙 ピット	弥生土器 土師器 須恵器 石器				

松江市文化財調査報告書 第107集

二反田遺跡発掘調査報告書

2006年8月

発行 松江市教育委員会

財團法人松江市教育文化振興事業団

印刷 松栄印刷有限会社

松江市西川津町667-1